

一般国道8号敦賀バイパス
関係遺跡調査報告書 第2集

吉 河 遺 跡

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

一般国道8号敦賀バイパス
関係遺跡調査報告書 第2集

吉 河 遺 跡

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1) 西方より見た第1～4次調査区全景



(2) 吉河遺跡出土主要土器

序

敦賀は、古代北陸道の枢要地であり、各時代の主要な遺跡が数多く存在しています。この吉河遺跡の周辺でも、平野部には弥生時代～古墳時代の集落跡である中遺跡や坂ノ下遺跡が、また山麓部には国指定史跡の中郷古墳群をはじめとして多数の古墳があります。

吉河遺跡は、弥生時代中期～後期の集落跡ですが、一般国道8号バイパスの建設予定地内で新たに発見され、事前に調査することになったものです。発掘調査は昭和56年に着手し、同60年に終了しました。

この調査では、竪穴式住居や掘立柱建物、方形周溝墓、墓道など多数の遺跡と、弥生土器や石器、木器など多量の遺物を検出しました。本格的な墓道の検出は、全国でも初例であり、鶏形土製品やカモシカの絵画文土器も珍しい品です。また、濃尾・近江など多数の他地方の土器が混在することは、敦賀の地域性を示すものです。なによりも、墓域と住居域からなる生活域がセットで発掘されたことは、弥生時代の集落構造を解明する上で重要な新発見であり、往時の人々の日常生活や文化をより一層明確にできることと思います。本報告が、遺跡の理解と保護の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を頂きましたこと、深く感謝申し上げますとともに、今後ともより一層のご支援をお願い申し上げます。

平成21年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、建設省近畿地方建設局福井工事事務所からの受託事業として、福井県教育庁文化課が昭和56年(1981)～昭和60年(1985)に実施した、一般国道8号敦賀バイパス建設に伴う、福井県敦賀市吉河字樋ノ水に所在する吉河遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本書の執筆は、次のように分担した。

中司照世 第1章、第2章第1節・第2節、第3章第1節・第2節5

月輪 泰 第3章第2節1・2・4 中司・月輪 第3章第2節6

中司・宮崎 認 第3章第2節3 赤澤徳明 第4章第1節・第2節1・第5章

田中勝之 第4章第2節2 工藤俊樹・坪田聡子 第4章第2節3

浅野良治 第4章第2節4 本多達哉 第4章第2節5

(浅野は現在永平寺町教育委員会職員)

3. 本遺跡の発掘成果については、昭和58年(1983)に『吉河遺跡第1～第3次発掘調査概報』を、昭和61年(1986)に『吉河遺跡発掘調査概報』を発行しているが、本書との齟齬のある場合は、本書をもって訂正する。

4. 吉河遺跡の発掘調査の実施にあたっては、文化庁記念物課の指導や敦賀市教育委員会社会教育課の協力を得た。また、建設省近畿地方建設局福井工事事務所工務課・富山大学人文学部考古学研究室・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館・敦賀市立歴史民俗資料館・気比史学会・私立敦賀博物館・敦賀美術考古学会などの各機関の援助を得た。

なお、次の諸先生がたには、各専門分野からの指導・助言、あるいは自然科学的な分析をお願いした(順不同・所属は当時)

故小林行雄(京都大学名誉教授)、河原純之(文化庁)、金関 恕(天理大学)、粉川昭平(大阪市立大学)、水野正好(奈良大学)、岩崎卓也(筑波大学)、秋山進午・和田晴吾(以上富山大学)、故佐原 真(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、都出比呂志(大阪大学)、下條信行・川西宏幸(平安博物館)、安田喜憲(広島大学)

5. 本書の監修は工藤俊樹が行い、編集は月輪があたった。遺構・遺物の図化・図版作成は、執筆者のほか鯉本眞友美と山口 充、立壁 肇、畠山真証、枡家 豊、井之口茂、岩田直樹、木村茉莉が当たった。

報告書作成までに種々の協力や援助をいただいた関係各位・各機関に深謝したい。

この報告書は、本来ならば平成元年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至りました。なお、報告書原稿は、既に執筆されている部分もあることから、混乱を避けるため当時の内容で執筆を進めました。そのため、現在の見解とは一致しない部分があります。

目 次

	頁
第1章 調査の経過	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺 構	
第1節 遺構序説	16
第2節 遺構各説	16
1 竪穴住居	16
2 掘立柱建物	29
3 土塋	33
4 溝	47
5 墓道	48
6 方形周溝墓	51
第4章 遺 物	
第1節 遺物序説	80
第2節 遺物各説	81
1 弥生土器	81
2 石器	175
3 土製品・石製品	199
4 玉作関連遺物	203
5 木製品	209
第5章 ま と め	
第1節 土器について	215
第2節 遺構の時期と墓域と集落域について	218
第3節 おわりにあたって	220

図 版 目 次

- 口 絵
- (1) 西方より見た第1～4次調査区全景
 - (2) 吉河遺跡出土主要土器

- 図版第1 敦賀平野 (1) 全景 (2) 東部地区
- 図版第2 調査区全景 (1) 第1～6次調査区航空・合成写真
- 図版第3 航空写真(1) (1) 第1・2次調査区航空写真 (2) 第1～3次調査区航空写真
- 図版第4 航空写真(2) (1) 第4次調査区北部地区航空写真 (2) 第1～4次調査区航空写真
- 図版第5 航空写真(3) (1) 第5次調査区航空写真 (2) 第6次調査区航空写真
- 図版第6 第6次調査区 (1) 全景 (2) 南部全景
- 図版第7 竪穴住居1 (1) 全景 (2) 土器出土状態 (3) 土器出土状態
- 図版第8 竪穴住居2 (1) 全景 (2) 住居中央部の土壌 29 (3) 土器出土状態
- 図版第9 竪穴住居1・3・4 (1) 竪穴住居1・3・4航空写真 (2) 竪穴住居3・4全景
- 図版第10 竪穴住居5 (1) 全景 (2) 土器出土状態 (3) 土器出土状態
- 図版第11 竪穴住居6 (1) 全景 (2) 航空写真
- 図版第12 掘立柱建物1・2 (1) 掘立柱建物1全景 (2) 掘立柱建物2全景
- 図版第13 掘立柱建物3・4 (1) 掘立柱建物3全景 (2) 掘立柱建物4全景
- 図版第14 掘立柱建物5・6 (1) 掘立柱建物5・6全景 (2) 掘立柱建物5全景
- 図版第15 掘立柱建物6・7 (1) 掘立柱建物6全景 (2) 掘立柱建物7全景
- 図版第16 掘立柱建物8 (1) 全景 (2) 柱根、礎板検出状況
- 図版第17 土壌4・他 (1) 土壌4全景 (2) 10・11E区土壌群全景
- 図版第18 土壌18・76 (1) 土壌18全景 (2) 土壌76全景
- 図版第19 土壌76・80 (1) 土壌76半掘全景 (2) 土器出土状態 (3) 土器出土状態
(4) 土壌80全景
- 図版第20 土壌81・88 (1) 土壌81全景 (2) 土壌88全景
- 図版第21 土壌138・351 (1) 土壌138全景 (2) 土壌351全景
- 図版第22 土壌128・168・236 (1) 土壌128・168全景 (2) 土壌236全景
- 図版第23 土壌23・64 (1) 土壌23全景 (2) 土器出土状態 (3) 土壌64全景
(4) 土器出土状態
- 図版第24 土壌153・77・224・243・244 (1) 土壌153遺物出土状態 (2) 鶏形土製品出土状態
(3) 土壌77・224全景 (4) 土壌243・244全景
- 図版第25 土壌249・295 (1) 土壌249全景 (2) 土壌295全景
- 図版第26 土壌256・267・290・291 (1) 土壌256遺物出土状態 (2) 土壌267遺物出土状態
(3) 土壌290遺物出土状態 (4) 土壌291木製品出土状態
- 図版第27 土壌293・305 (1) 土壌293全景 (2) 木製品出土状態
(3) 土壌305全景 (4) 石剣出土状態
- 図版第28 土壌306 (1) 土壌306全景
- 図版第29 溝1・11・16 (1) 溝1遺物出土状態 (2) 溝11遺物出土状態

- (3) 溝 16 遺物出土狀態 (4) 遺物出土狀態
- 図版第30 溝 16 (1) 遺物出土狀態 (2) 全景
- 図版第31 溝 16 (1) 木製品群出土狀態 (2) 木製品群出土狀態
- 図版第32 溝 16 (1) 槽出土狀態 (2) 槽出土狀態 (3) 鉢出土狀態 (4) 鉢出土狀態
- 図版第33 溝 16 (1) 全景 (2) 西端
- 図版第34 溝 16 (1) 木製品群出土狀態 (2) 建築部材出土狀態 (3) 木製品出土狀態
- 図版第35 溝 34・36・106 (1) 溝 34 土器出土狀態 (2) 溝 36 土器出土狀態 (3) 溝 106 全景
(4) 4 K区磨製石斧群出土狀態
- 図版第36 墓道 (1) 幹道 (2) 枝道B (3) 枝道D
- 図版第37 方形周溝墓 1 (1) 全景 (2) 南溝供献土器出土狀態 (3) 南溝供献土器出土狀態
(4) 周溝北東隅供献土器出土狀態
- 図版第38 方形周溝墓 2・3 (1) 方形周溝墓2全景 (2) 方形周溝墓3全景
- 図版第39 方形周溝墓 3 (1) 墓壙全景 (2) 墓壙全景
- 図版第40 方形周溝墓 4・5 (1) 方形周溝墓 4 全景 (2) 方形周溝墓5全景
- 図版第41 方形周溝墓 6・7 (1) 方形周溝墓 6 全景 (2) 方形周溝墓7全景
- 図版第42 方形周溝墓 7・8 (1) 方形周溝墓 7 東溝供献土器出土狀態 (2) 方形周溝墓 7 東溝
供献土器出土狀態 (3) 方形周溝墓 7 北溝供献土器出土狀態
(4) 方形周溝墓 7 南溝供献土器出土狀態 (5) 方形周溝墓 8 全景
- 図版第43 方形周溝墓 9 (1) 全景 (2) 埋葬施設供献土器出土狀態 (3) 埋葬施設全景
- 図版第44 方形周溝墓 10 (1) 全景 (2) 東溝壺棺出土狀態 (3) 東溝壺棺出土狀態
- 図版第45 方形周溝墓 11 (1) 全景 (2) 南溝供献土器出土狀態 (3) 東溝供献土器出土狀態
- 図版第46 方形周溝墓 12 (1) 全景
- 図版第47 方形周溝墓 13 (1) 全景 (2) 埋葬施設粘土塊出土狀態 (3) 南溝供献土器出土
狀態 (4) 大型磨製石包丁出土狀態 (5) 西溝供献土器出土狀態
- 図版第48 方形周溝墓 14 (1) 全景 (2) 埋葬施設全景 (3) 北溝供献土器出土狀態
(4) 東溝供献土器出土狀態
- 図版第49 方形周溝墓 15 (1) 全景 (2) 北溝供献土器出土狀態 (3) 東溝供献土器出土狀態
- 図版第50 方形周溝墓 16 (1) 全景 (2) 北溝供献土器出土狀態
(3) 周溝北西隅供献土器出土狀態
- 図版第51 方形周溝墓 17 (1) 全景 (2) 東溝供献土器出土狀態
- 図版第52 方形周溝墓 18 (1) 全景 (2) 北溝供献土器出土狀態 (3) 西溝供献土器出土狀態
- 図版第53 方形周溝墓 19 (1) 全景 (2) 東溝供献土器出土狀態 (3) 北溝供献土器出土狀態
- 図版第54 方形周溝墓 20 (1) 全景 (2) 東溝供献土器出土狀態 (3) 西溝壺棺出土狀態
(4) 西溝壺棺出土狀態

- 図版第55 方形周溝墓 21 (1) 全景
- 図版第56 方形周溝墓 22 (1) 全景 (2) 東溝供献土器出土状態 (3) 西溝供献土器出土状態
- 図版第57 方形周溝墓 23 (1) 全景 (2) 北溝供献土器出土状態 (3) 北溝供献土器出土状態
- 図版第58 方形周溝墓 24 (1) 全景 (2) 周溝南東隅供献土器出土状態
(3) 北溝供献土器出土状態
- 図版第59 方形周溝墓 25 (1) 全景
- 図版第60 竪穴住居出土土器 (1) 竪穴住居 1～5 出土土器
- 図版第61 竪穴住居出土土器 (2) 竪穴住居 1～6 出土土器
- 図版第62 土壙出土土器 (1) 土壙 12～76 出土土器
- 図版第63 土壙出土土器 (2) (1) 土壙 1～20 出土土器 (2) 土壙 11～49 出土土器
- 図版第64 土壙出土土器 (3) 土壙 29～76 出土土器
- 図版第65 土壙出土土器 (4) 土壙 29～153 出土土器
- 図版第66 土壙出土土器 (5) (1) 土壙 64～100 出土土器 (2) 土壙 77～197 出土土器
- 図版第67 土壙出土土器 (6) 土壙 153～249 出土土器
- 図版第68 土壙出土土器 (7) 土壙 224～295 出土土器
- 図版第69 土壙出土土器 (8) 土壙 291～317 出土土器
- 図版第70 土壙出土土器 (9) 土壙 226～315 出土土器
- 図版第71 土壙出土土器 (10) (1) 土壙 244～298 出土土器 (2) 土壙 208～258 出土土器
- 図版第72 土壙出土土器 (11) 土壙 306～320 出土土器
- 図版第73 土壙出土土器 (12) (1) 土壙 204～293 出土土器 (2) 土壙 203～338 出土土器
- 図版第74 土壙出土土器 (13) (1) 土壙 307～328 出土土器 (2) 土壙 320～336 出土土器
- 図版第75 土壙出土土器 (14) (1) 土壙 331～347 出土土器 (2) 土壙 85～294 出土土器
- 図版第76 溝出土土器 (1) 溝 11 出土土器
- 図版第77 溝出土土器 (2) 溝 4～36 出土土器
- 図版第78 溝出土土器 (3) 溝 11～36 出土土器
- 図版第79 溝出土土器 (4) (1) 溝 11 出土土器 (2) 溝 11 出土土器
- 図版第80 溝出土土器 (5) (1) 溝 11 出土土器 (2) 溝 5～107 出土土器
- 図版第81 溝出土土器 (6) (1) 溝 12～88 出土土器 (2) 溝 47 出土土器
- 図版第82 溝出土土器 (7) (1) 溝 11～16 出土土器 (2) 溝 106 出土土器
- 図版第83 方形周溝墓出土土器 (1) 方形周溝墓 1～7 出土土器
- 図版第84 方形周溝墓出土土器 (2) 方形周溝墓 7 出土土器
- 図版第85 方形周溝墓出土土器 (3) 方形周溝墓 7～10 出土土器
- 図版第86 方形周溝墓出土土器 (4) 方形周溝墓 9～12 出土土器
- 図版第87 方形周溝墓出土土器 (5) 方形周溝墓 12～13 出土土器

- 図版第88 方形周溝墓出土土器 (6) 方形周溝墓 14 出土土器
- 図版第89 方形周溝墓出土土器 (7) 方形周溝墓 14 ～ 17 出土土器
- 図版第90 方形周溝墓出土土器 (8) 方形周溝墓 17 出土土器
- 図版第91 方形周溝墓出土土器 (9) 方形周溝墓 17 ～ 20 出土土器
- 図版第92 方形周溝墓出土土器 (10) 方形周溝墓 22 ～ 24 出土土器
- 図版第93 包含層出土土器 (1)
- 図版第94 方形周溝墓溝出土土器 (1) 方形周溝墓 1 ～ 16 出土土器
(2) 方形周溝墓 6 ～ 26 出土土器
- 図版第95 方形周溝墓溝および包含層出土土器 (1) 方形周溝墓 14 ～ 23 出土土器
(2) 包含層出土土器
- 図版第96 包含層出土土器 (2)
- 図版第97 包含層出土土器 (3)
- 図版第98 包含層出土土器 (4)
- 図版第99 包含層出土土器および土器微細
- 図版第100 土器微細
- 図版第101 石器 (1)
- 図版第102 石器 (2)
- 図版第103 石器 (3)
- 図版第104 石器 (4)
- 図版第105 石器 (5)
- 図版第106 石器 (6)
- 図版第107 石器 (7)
- 図版第108 石器 (8)
- 図版第109 石器 (9)
- 図版第110 石器 (10)
- 図版第111 土製品
- 図版第112 玉作関連遺物 (1) (1) 管玉荒割り未成品 (2) 管玉未成品 (形割～研磨)
- 図版第113 玉作関連遺物 (2) (1) 玉類 (2) 玉作り工具
- 図版第114 木製品 (1)
- 図版第115 木製品 (2)
- 図版第116 木製品 (3)
- 図版第117 木製品 (4)

挿 図 目 次

	頁
第1図 西方より見た試掘調査時の吉河遺跡	1
第2図 吉河遺跡第1～6次調査区	2
第3図 西方より見た第1・2次調査区	3
第4図 北西方より見た第1～3次調査区	3
第5図 北方より見た第4次調査区北部地区	3
第6図 南方より見た第1～4次調査区	4
第7図 北方より見た第5次調査区	4
第8図 北方より見た第6次調査区	5
第9図 敦賀平野の地形分類図	7
第10図 吉河遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	9
第11図 敦賀市出土土器実測図	10
第12図 明神山古墳群分布図	12
第13図 遺構分布図	16-17
第14図 住居域遺構平面図1	17
第15図 住居域遺構平面図2	18
第16図 住居域遺構平面図3	19
第17図 住居域遺構平面図4	20
第18図 住居域遺構平面図5	21
第19図 住居域遺構平面図6	22
第20図 住居域遺構平面図7	23
第21図 住居域遺構平面図8	24
第22図 竪穴住居1実測図	24-25
第23図 竪穴住居2実測図	25
第24図 竪穴住居3・4実測図	26
第25図 竪穴住居5実測図	27
第26図 竪穴住居6実測図	28-29
第27図 掘立柱建物1実測図	29
第28図 掘立柱建物2実測図	29
第29図 掘立柱建物3実測図	30
第30図 掘立柱建物4実測図	30
第31図 掘立柱建物5実測図	31

第32図	掘立柱建物 6 実測図	31
第33図	掘立柱建物 7 実測図	32
第34図	掘立柱建物 8 実測図	32
第35図	土壙 4・5・6・12・14・18・19・20 実測図	39
第36図	土壙 23・76・80・81 実測図	40
第37図	土壙 86・88・92・128・168 実測図	41
第38図	土壙 138・145・153・224・236 実測図	42
第39図	土壙 243・244・252・253・291・292・294 実測図	43
第40図	土壙 295・305・306・314・346・351 実測図	44
第41図	溝 16 遺物出土状況図	48-49
第42図	方形周溝墓 1 実測図	52
第43図	方形周溝墓 2 実測図	53
第44図	方形周溝墓 3 実測図	54
第45図	方形周溝墓 3 埋葬施設実測図	55
第46図	方形周溝墓 4 実測図	56
第47図	方形周溝墓 5 実測図	57
第48図	方形周溝墓 6 実測図	58
第49図	方形周溝墓 7 実測図	58-59
第50図	方形周溝墓 7 埋葬施設実測図	59
第51図	方形周溝墓 8 実測図	60
第52図	方形周溝墓 9 実測図	61
第53図	方形周溝墓 9 埋葬施設実測図	62
第54図	方形周溝墓 10 実測図	63
第55図	方形周溝墓 11 実測図	64
第56図	方形周溝墓 12 実測図	65
第57図	方形周溝墓 13 埋葬施設実測図	66
第58図	方形周溝墓 13 実測図	67
第59図	方形周溝墓 14 埋葬施設実測図	68
第60図	方形周溝墓 14 実測図	68-69
第61図	方形周溝墓 15 実測図	69
第62図	方形周溝墓 16 実測図	70
第63図	方形周溝墓 17 実測図	71
第64図	方形周溝墓 18 実測図	72
第65図	方形周溝墓 19 実測図	73

第66図	方形周溝墓 20 壺棺出土状況図	74
第67図	方形周溝墓 20 実測図	74-75
第68図	方形周溝墓 21 実測図	75
第69図	方形周溝墓 22 実測図	76
第70図	方形周溝墓 23 実測図	77
第71図	方形周溝墓 24 実測図	78
第72図	方形周溝墓 25 実測図	79
第73図	竪穴住居 1・2 出土土器実測図	81
第74図	竪穴住居 3 出土土器実測図	82
第75図	竪穴住居 3・5・6 出土土器実測図	83
第76図	土壙出土土器実測図 1	85
第77図	土壙出土土器実測図 2	86
第78図	土壙出土土器実測図 3	87
第79図	土壙出土土器実測図 4	88
第80図	土壙出土土器実測図 5	89
第81図	土壙出土土器実測図 6	90
第82図	土壙出土土器実測図 7	94
第83図	土壙出土土器実測図 8	95
第84図	土壙出土土器実測図 9	96
第85図	土壙出土土器実測図 10	97
第86図	土壙出土土器実測図 11	99
第87図	土壙出土土器実測図 12	100
第88図	土壙出土土器実測図 13	101
第89図	土壙出土土器実測図 14	104
第90図	土壙 306 出土絵画土器拓本	104
第91図	土壙出土土器実測図 15	106
第92図	土壙出土土器実測図 16	107
第93図	土壙出土土器実測図 17	109
第94図	溝出土土器実測図 1	111
第95図	溝出土土器実測図 2	112
第96図	溝出土土器実測図 3	113
第97図	溝出土土器実測図 4	115
第98図	溝出土土器実測図 5	116
第99図	溝出土土器実測図 6	118

第100図	溝出土土器実測図 7	119
第101図	方形周溝墓出土土器実測図 1	121
第102図	方形周溝墓出土土器実測図 2	122
第103図	方形周溝墓出土土器実測図 3	123
第104図	方形周溝墓出土土器実測図 4	124
第105図	方形周溝墓出土土器実測図 5	125
第106図	方形周溝墓出土土器実測図 6	126
第107図	方形周溝墓出土土器実測図 7	128
第108図	方形周溝墓出土土器実測図 8	130
第109図	方形周溝墓出土土器実測図 9	131
第110図	方形周溝墓出土土器実測図 10	132
第111図	方形周溝墓出土土器実測図 11	133
第112図	方形周溝墓出土土器実測図 12	134
第113図	方形周溝墓出土壺棺実測図	135
第114図	方形周溝墓出土土器実測図 13	137
第115図	包含層出土土器実測図 1	140
第116図	包含層出土土器実測図 2	141
第117図	包含層出土土器実測図 3	142
第118図	包含層出土土器実測図 4	143
第119図	石器実測図 1	177
第120図	石器実測図 2	179
第121図	石器実測図 3	180
第122図	石器実測図 4	182
第123図	石器実測図 5	184
第124図	石器実測図 6	185
第125図	石器実測図 7	186
第126図	石器実測図 8	187
第127図	石器実測図 9	189
第128図	石器実測図 10	190
第129図	石器実測図 11	191
第130図	石器実測図 12	192
第131図	土製品実測図	200
第132図	土製品・石製品実測図	201
第133図	玉作関連遺物実測図 1	204

第134図	玉作関連遺物実測図 2	205
第135図	玉作関連遺物実測図 3	207
第136図	木製品実測図 1	209
第137図	木製品実測図 2	210
第138図	木製品実測図 3	212
第139図	木製品実測図 4	213

表 目 次

	頁
第1表 吉河遺跡周辺の遺跡一覧	9
第2表 敦賀市内出土土器観察表	15
第3表 吉河遺跡土壙観察表	45
第4表 弥生土器観察表	145
第5表 石器組成表1	176
第6表 石器組成表2	176
第7表 石器観察表	194
第8表 土製品・石製品観察表	202
第9表 玉作関連遺物計測表	208
第10表 木製品観察表	214

第1章 調査の経過

敦賀は古来より、近畿と北陸を結ぶ交通の要地として重要な位置を占めてきた。現在もその位置は変わらず、JR 北陸本線、北陸自動車道、一般国道 8 号線など、北陸路の主要交通機関はいずれも敦賀を経由している。

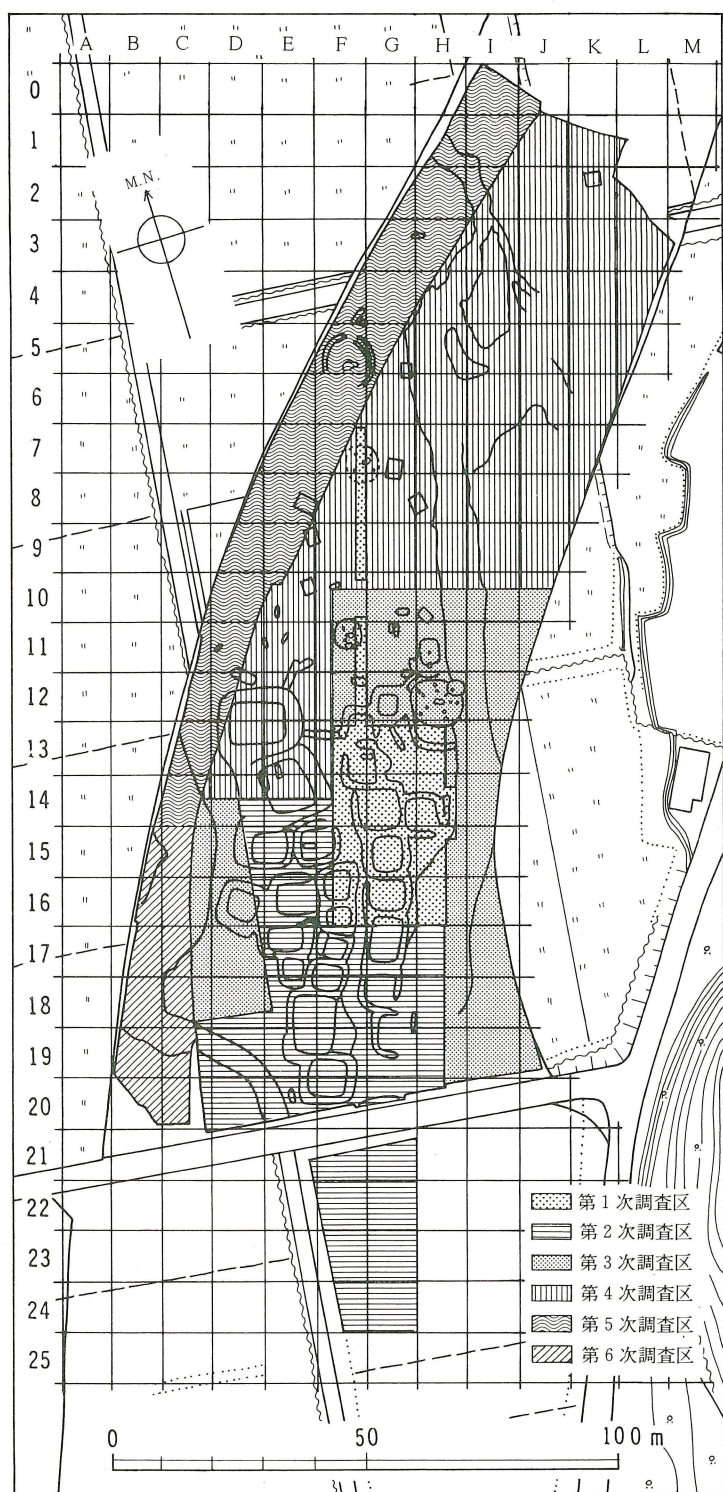
このうち敦賀市街を南北に貫く一般国道 8 号線は、市街地中央部で一般国道 27 号線と分岐し、近年その交通量の増加に伴い著しい渋滞を生じるようになった。この渋滞緩和のため、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（以下「建設省」と略す）は、昭和 45（1970）年に敦賀市田結から同市鳩原まで、市街地を東に迂回するバイパスの新設を立案した。建設省は、このバイパス新設計画に関連し、路線予定地内における遺跡存在の有無についての照会を、関係各部署に対して行ったが、当時は敦賀平野における遺跡の把握は極めて不十分なものであり、満足な回答を行えない状況にあった。こうした状況のもと、昭和 51（1976）年には、敦賀市教育委員会社会教育課（以下「市教委」と略す）職員が、バイパス新設予定地内において、当地域の古墳群で最も中核的な存在ともいえる明神山古墳群を確認した。このため建設省では、改めて全路線予定地内における遺跡存否の確認を、福井県教育庁文化課（以下「県教委」と略す）に要請した。これを受けて県教委は、路線予定地のうち中～坂ノ下地区についての分布調査を、昭和 56（1981）年 4 月 13 日に実施した。この結果、吉河区の路線予定地内において弥生時代の遺物包含層を確認し、初めて吉河遺跡の存在が明らかとなった。県教委は、吉河遺跡の性格および範囲を確認するため、同年 5 月 18～25 日の間、8 箇所の特レンチによる試掘調査を実施した。その結果、吉河遺跡は、弥生時代中～後期の集落遺跡であり、バイパス路線予定地内における推定面積は 6,000㎡にもおよぶもの



第1図 西方より見た試掘調査時の吉河遺跡

と考えられた。しかしながら、試掘調査で検出した遺構・遺物は予想外に少なく、遺構は土壇 2 基、溝 2 条、柱穴 2 個、遺物はコンテナバット 2 箱分ほどを得たにとどまった。

この試掘調査の結果に基づいて、建設省と県教委は改めて協議を行い、同年秋より記録保存のための緊急調査を実施することとした。



第2図 吉河遺跡第1～6次調査区 (縮尺 1/1,500)

吉河遺跡の調査は、昭和 56 (1981) 年 10 月より開始し、昭和 60 (1985) 年 5 月まであしかけ 5 年、6 次にわたり、当初の予想をはるかに上回る多数の遺構・遺物を検出した。以下、各次調査の経過を略述しておきたい (第 2 図)。

第 1 次調査 調査期間昭和 56 (1981) 年 10 月～12 月、調査面積 1,015m²。バイパス路線内における遺跡の全面発掘を計画し、10 m メッシュによるグリッド割り (北より 0～25 列、西より A～M 列) を行った。より正確な遺跡の内容を把握するため、遺跡中央部を南北に縦断するトレンチを設定し調査を開始した。トレンチ北部では、試掘調査同様希薄な遺構を検出するにとどまった。これに対しトレンチ南部では複数の方形周溝墓を検出し、さらにトレンチを東側に拡張することによりその群集が明らかとなった。当初の予想に反する良好な遺構の存在から、調査は遺構検出作業と遺跡の範囲を再確認する作業を併行することとした。

調査の結果、群集する 10 基の方形周溝墓ほかを検出し、遺跡の路線内面積は約 13,300m²におよぶものと推定



第3図 西方より見た吉河遺跡第1～2次調査区



第4図 北西方より見た第1～3次調査区



第5図 北方より見た第4次調査区北部地区

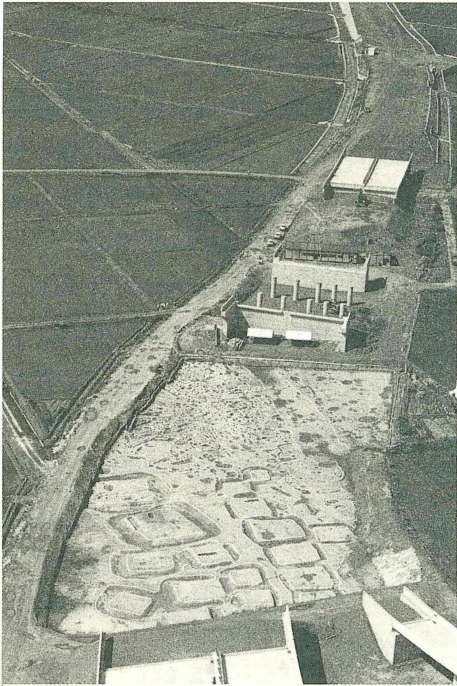
された。

第2次調査 調査期間昭和57(1982)年3～6月、調査面積約2,310㎡。第1次調査区に南・西接する地区および、農道南方の地区を対象として調査を実施した。

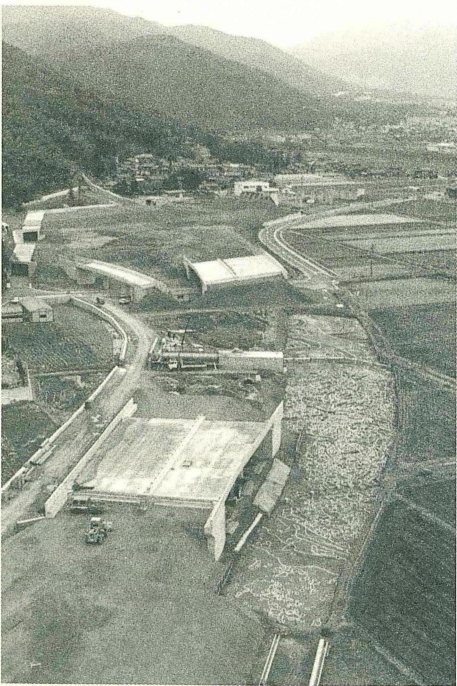
前者の地区では、整然と営まれた方形周溝墓群のほか、墓道、方形周溝墓群の西縁を流れる自然流路などを検出した。検出遺構のうち墓道は、方形周溝墓群の中央を南北に貫く「幹道」と各墓を結ぶ「枝道」から成り、注目を惹いた。また方形周溝墓の総数は、23基となった。

後者の地区では、後世の削平のため、遺構を検出することはできなかった。

第3次調査 調査期間昭和57(1982)年10～12月、調査面積約2,376㎡。バイパス本線部南半で未調査であった第1次・第2次調査区周辺の調査を実施した。調査は方形周溝墓群に北接する地区から開始し、新たに方形周溝墓1基、円形の大型竪穴住居1棟を検出した。方形周溝墓群に東・西接する地区の調査では、未完掘であった遺構を完掘したほか、方形周溝墓群の東縁では、北流する自然流路1条を検出した。さらに北方へと調査を進め、新たに竪穴住居3棟を検出したほか、多数の土壌、



第6図 南方より見た第1～4次調査区



第7図 北方より見た第5次調査区

溝、柱穴を検出した。また、骨片の検出から、土壌の一部は土壌墓と判断された。今回の調査により、本遺跡が南部の墓域と北部の住居域で構成される、集落遺跡であることが推測された。

第4次調査 調査期間昭和58(1983)年3～12月、調査面積5,223㎡。バイパス本線内北半の調査を実施した。今回の調査は、工事工程に合わせ、遺跡北端部より調査に着手し、その後南方へと調査を進めた。

その結果、第3次調査で検出した方形周溝墓群東縁を北流する流路の下流部、および住居域を構成する多数の遺構を検出した。遺構は流路の両岸に広がるが、うち東岸の遺構は不定形の落ち込みや流路を主体とし、明確な遺構としては掘立柱建物1棟を検出したにとどまった。これに対し西岸では、本遺跡の住居域と墓域の一部を構成する、多数の遺構を検出した。遺構は複雑に重複しており、主要な例として竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟、方形周溝墓1基があるほか、土壌墓を含む土壌、溝、柱穴多数を検出した。

また、出土遺物は、今回の調査が住居域を中心としたことから、それまでの調査に比べ、量的に著しく増加した。またその内容も、自然流路内より出土した木器や、土壌より出土した鶏形土製品など、豊富なものであった。今回の調査により、遺跡南部の墓域が方形周溝墓群とその北縁に分布する土壌墓群から成ることが判明するとともに、北部住居域の内容もさらに明確なものとなった。また、自然流路東岸への後期における遺構の進出も確認された。

第5次調査 調査期間昭和59(1984)年3～12月、調査面積1,942㎡。前回の調査で本線内の調査は終了し、残された側道部分の調査を開始した。このうち濃密な遺構分布が予想される、側道北部の地区から調査に着手した。

同地区では、第4次調査同様多数の遺構を検出し



第8図 北方より見た第6次調査区

下記のとおりである。

たが、なかでも2回の拡張を行った大型の竪穴住居床面からは、碧玉細片が多く出土し、本遺跡が玉作り遺跡であることを推測させた。これ以外の主要な遺構として、掘立柱建物1棟を検出した。

また、遺物では、調査区北端の自然流路から木器とともに銅鏃1個が出土したほか、カモシカを描いた2個体分の絵画文土器や、完形の磨製石剣が出土した。

住居域部分の調査後、方形周溝墓群西側の調査を開始し、第2次調査検出の西側自然流路に合流すると思える、溝1条を検出した。

第6次調査 調査期間昭和60(1985)年3～5月、調査面積534㎡。側道部分に残された、遺跡南端地区の調査を実施した。遺跡西縁を北流する自然流路ほかを検出した。遺物は、若干の土器、石器を得たにとどまった。

なお、調査終了時における本遺跡の調査関係者は、

建設省近畿地方建設局福井工事事務所

山本淳二(元所長)、山田 功(同)、三好逸二(前同)、宮下 武(現同)、水嶋 清(工務課長)、
宮下正義(元同道路工務係長)、中広善一(前同)、多田勝義(現同)、平木武志(元同設計第2係長)、
仲 明行(前建設監督官)、袖川正支(現同)

調査事務局(福井県教育庁文化課)

熊谷真敏(元文化課長)、山口増喜(前同)、西川数丸(現同)、山田武男(前同参事)、折橋英雄(前
同課長補佐)、中島昭国(前同)、上杉 命(現同)、鈴木外夫(元同文化振興係長)、山本靖夫(前同)、
辻 晟顕(現同)、中西雅夫(同文化財保護係長)、山本広子・堀江祥子・矢野孝信(以上前同主事)、
田川時子・吉川美智子・島田英夫(以上現同)

発掘調査員

中司照世・工藤俊樹・仁科 章・山口 充(以上福井県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財調査員)、
池田雄二(前敦賀市教育委員会事務局社会教育課主事)、森下 敏(現同)

発掘調査補助員

荒川 史・木原 光・田上浩幸・中川 渉・野末浩之・坂 靖志・大竹 豊・吉田正人・宮田佐和子・

第1章 調査の経過

吉田由香・坂口美智子・夏原宏子・前田淳子・水野かおる・平田恵美子・紺道純子・藤野良子・北川美佐子・杉本弓子・伊藤政美（以上富山大学学生）、森下浩行（同志社大学大学院生）、山本英之・大室一宏・工藤茂博（以上同大学学生）、赤澤徳明・清水敦子（以上国学院大学学生）、望月精司（中央大学学生）、月輪 泰（大谷大学大学院生）中井精一（天理大学学生）、月輪 理（岡山大学学生）、平井敏勤、最上博子

発掘調査作業員

山口正雄・滝口 勝・前田昭典・武内みちゑ・前田千代子・山口よしえ・滝口とめ・吉谷はつ・奥野かね・山口裕子・高木豊子（以上吉河区）、寺腰繁三・成田清一・成田 勇・池上治三郎・成田治郎・成田はるえ・成田とみ子・成田みよ・成田こんめ・池田とめ・飯田はるえ・飯田千津枝・奥田吉枝・奥田みちえ・中谷としえ・酒井はつ（以上坂ノ下区）、藤森 生・藤森昌子・塚本ふさえ・金井初枝・中宮 都（以上中区）、納谷りよ子・草崎ふさえ・坂口芳子・納谷和子・草崎和美・岸本まゆみ・坂本冽子（以上深山寺区）、高木つわ子・坪塚つた子・茶谷久江・斉藤敏子・田上喜美枝・石塚幸枝・中村佐智子（以上檜曲区）、山本武雄・山本すて・稲葉ひさ・平松富江・平松洋子・桃谷福子・平山照子（以上高野区）、北野弘太郎・高橋勝一・北野総司・高橋良江・中原美津子・西田千代子・萩原幾子・北野さぬ枝・田辺幸子・東出悦子（以上余座区）、宮本房枝・宮本ヨシ江・岸本つぎ・宮本喜美子・山本花子・小西範子（以上大蔵区）、牛鬼和江・竹内をみ・吉田末子・吉田八重野・江口浩子（以上井川区）、田中照子・金井のぶ子・宮下富美子（以上阿曽区）、寺田鉄子・柿本八重子（以上葉原区）、桑野弘子・桑野裕子（以上新保区）、吉見キミ子（川北区）、布谷道治・杉田和弘・山田綾子（以上呉竹町）、和田敏男（津内町）、河下駿馬（三島町）、南雲良規（公文名区）

遺物整理作業員（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

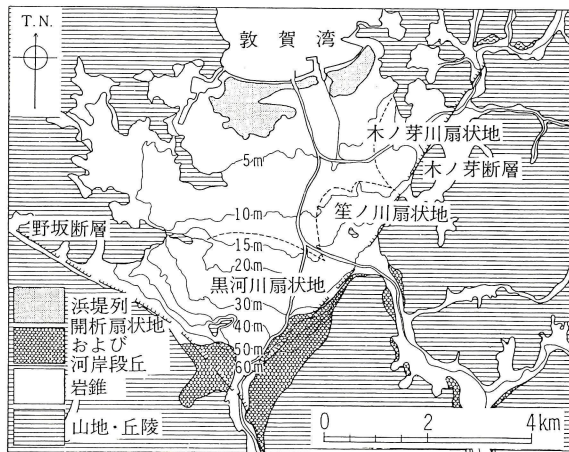
大藤文子・宇野和子・増田由里・片岡ひとみ・川崎順子・伊内スミ子・林 洋子・酒井恵美子・山田基容子・梅原道代・木村恵美・村中順子・前田由美枝・柳本千鶴美・小森早苗・岩崎早苗・高岡紀子・吉川みどり・藤井尚美・茨山宏子・平野泰恵・坂下晶子・中野恵子・斉藤紀子・辻本雅代・細田栄子・斉藤律子・石塚則子・坪田啓子・釣部聡美・舟沢美樹・後藤朱実・酒井美由紀・土橋さとみ・竹内一美

第2章 周辺の地理的・歴史的環境

第 1 節 地理的環境

吉河遺跡は、福井県敦賀市吉河字樋ノ水に位置する。吉河遺跡の所在する敦賀市は、福井県のほぼ中央に位置し、周囲を木ノ芽・越美・野坂の各山地と敦賀湾に囲まれた、東西南北各約5kmの扇状を呈する敦賀平野をその中心としている。以下、敦賀平野の地形について、概括的に記述することとする（第9図）。

琵琶湖北岸の野坂山地内には、本州大破砕帯の一部を形成する断層・地溝が多数存在するが、その一部は、野坂断層・木ノ芽断層として、敦賀平野南東および西の縁辺



第9図 敦賀平野の地形分類図

(注1 文献より改変・転載)

に顕著な階段状の断層崖を見せており、平野の生成は、これら断層線に沿った地盤の沈降作用によると考えられている。敦賀平野に流入する主要な河川は、野坂山地内を源とする黒河川・筭ノ川と木ノ芽山地内を源とする木ノ芽川であり、平野内で合流し筭ノ川となり敦賀湾へと注いでいる。これら3河川は平野流入に伴い、それぞれ黒河川扇状地・筭ノ川扇状地・木ノ芽川扇状地と呼称される扇状地を平野東部～南部に連続的に形成しており、この一帯は複合扇状地となっている。また、主要3河川の山間部および山間出口部には、洪積世の形成にかかわる開析扇状地・河岸段丘が存在する。これに対し、平野北端の海岸線には、「気比の松原」として著名な浜堤が形成されている。この浜堤は形成時期を異にする3列の浜堤列から成り、その形成は弥生時代中期以前と考えられている²。現在この浜堤東部は、開発によりその旧景を失っている。扇状地と浜堤に挟まれた平野中央部は、地表勾配が緩慢な地域であり、潟湖上を河川堆積物が埋積した三角州低地となっている。このほか平野東部と西部の出入の著しい山脚周辺の地域には、背後の山地の沈降により生じた湿地帯（漏れ谷）が、また平野北西部の山麓には、風化岩屑により形成された岩錐が、それぞれ特徴的な地形として認められる。このように敦賀平野の地形は大きく分けて、北端海岸線の浜堤・平野中央部の三角州低湿地・平野南および西縁山際の扇状地の3つから成るといえよう。

さて、この敦賀平野内に所在する吉河遺跡の立地を見れば、大略的には、笹ノ川扇状地の北東末端部、木ノ芽断層により形成された断層崖下の標高約 10 m の地点に立地する遺跡、とすることができる。また、上述のように遺跡の北方には、三角州低湿地および木ノ芽扇状地との縫合部に生じた遅堆積の低湿地が存在しており、水田としての利用が推測される。さらに遺跡周辺の地形

を見れば、本遺跡の立地する筍ノ川扇状原上は南西から北東に向って傾斜を見せている。調査で検出した2条の自然流路は、扇状原上の微妙な起伏に沿い、この緩斜面に舌状の地形区画を与えている。本遺跡はまさにこの舌状区画内に立地する遺跡である。

第2節 歴史的環境

吉河遺跡の位置する敦賀平野においては、近年までに少なくない数の遺跡が発見されている。以下、この地域に所在する主な遺跡について順次記述する。ただし、なお遡る時期の遺跡や、あるいは各時代を通していえることではあるが、集落跡の確認数ははなはだ少ない。そこで、そうした欠を補うため、一部の単独遺物発見地についても言及することとしたい。

まず石器時代について述べると、遺憾ながら未だ不明な部分が多い。現在判明している例はいずれも縄文時代以降のものであって、旧石器時代の例は存在しない。そして、縄文時代の例についても明確に遺跡と断定しうる例は存在せず、出土遺物もきわめて断片的なものに過ぎない。参考までに縄文時代の遺物の出土地を列挙すれば、白木³（土器片）、常宮の登山口（磨製石斧、第10図E）、山の上1号墳⁴（中期土器片・磨製石斧、同図17）、立洞2号墳⁵（石匙、同図18）、吉河遺跡（後期土器片、同図21）である。

次に、弥生時代の遺跡も未だ確認数は少ない。そのうち松島遺跡⁶（同図47）は、既述の3列の浜堤のうち最も南部に位置する浜堤上に所在し、早く中期の土器片若干が採集されている。

また、中遺跡⁷（同図14）は、中集落西方の木ノ芽川扇状地上に位置する。昭和51・52（1976・77）年に、県教委が北陸自動車道・敦賀バイパス建設に先立って緊急発掘調査を実施した。その結果、検出遺構は溝など比較的少数に止まったが、後期の弥生土器など多数の品が出土している。

さらに、坂ノ下遺跡（同図25）は坂ノ下の山麓、筍ノ川扇状地上に位置する。昭和60・61（1985・86）年に、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下「県埋文」と略す）が敦賀バイパス建設に先立って緊急発掘調査を実施した。その結果、前期から後期にかけての土器・鉄器など若干の遺物が出土している。

そのほか、大蔵遺跡（同図12）、筋生野遺跡（同図42）などでも、遺物若干が採集されている。また、遺物の単独出土ではあるが、馬坂（同図D）で中期の壺1個が、長沢（同図B）で終末期の甕片など数個が採集されている⁸。

続く古墳時代の遺跡のうちでは、集落跡の確認数は少ない。上述の中遺跡で、昭和61（1986）年に市教委の緊急発掘調査によって中・後期の土師器、須恵器が、坂ノ下遺跡で前～後期の土師器、須恵器が、志比前神社遺跡⁹（同図26）で中期の土師器が、それぞれ若干ずつ出土しているに止まる。また、遺跡の性格が判明していないが、沓見南方の丘陵上（同図C）で中期の須恵器1個が¹⁰、沓丸山古墳南東麓（同図F）で後期の須恵器1個（第11図1）が¹¹採集されている。

ところが、古墳については、顕著な存在であるため、他の時代と比べてきわめて確認数が多い。早く『敦賀市通史』に、石井左近氏による調査成果が報告されており¹²、その後の発掘調査例も多い。

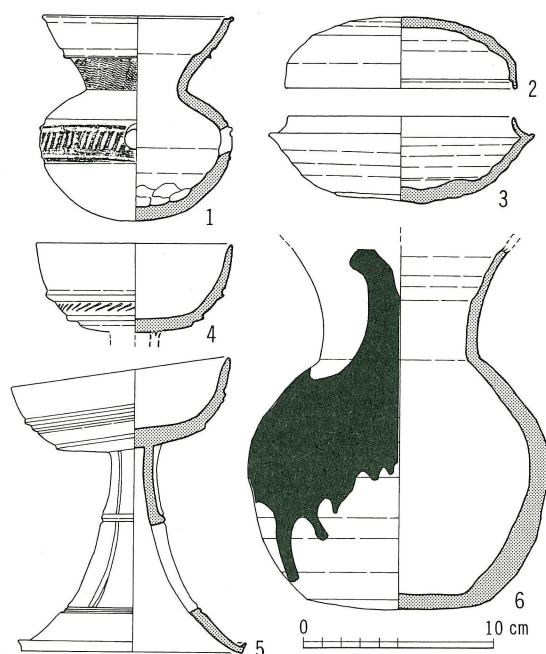
第2節 歴史的環境



第10図 吉河遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(縮尺1/75,000)

第1表 吉河遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡(地点)名
1	赤崎遺跡	12	大蔵遺跡	23	吉河古墳	34	榊林遺跡	45	旗護山城跡	56	香丸山古墳
2	鞠山遺跡	13	大塚1・2号墳	24	向出山古墳群	35	狐塚古墳	46	木崎遺跡		
3	葉原古窯跡群	14	中遺跡	25	坂ノ下遺跡	36	粟野南小学校古墳	47	松島遺跡		
4	金ヶ崎古墳	15	桃谷長者古墳	26	明神山古墳群	37	黒河1・2号墳	48	柳川遺跡		
5	金ヶ崎経塚	16	高野遺跡	27	岡山遺跡	38	高土居古墳	49	善衆衣谷横穴群		
6	金ヶ崎城跡	17	山の上1・2号墳	28	志比前神社遺跡	39	天満神社古墳	50	妙華谷横穴群	A	本町
7	手筒山城跡	18	立洞古墳群	29	宮山古墳群	40	秋葉山古墳	51	穴地藏古墳群	B	長沢
8	堂山磐跡	19	深山寺経塚群	30	衣掛山古墳群	41	沢遺跡	52	香見横穴群	C	香見
9	氣比神宮境内遺跡	20	中村山1・2号墳	31	橘原1・2号墳	42	筋生野遺跡	53	名子古墳	D	馬坂
10	舞崎遺跡	21	吉河遺跡	32	山泉古墳群	43	金山城跡	54	白塚古墳	E	常宮
11	前山古墳	22	小谷ヶ洞1・2号墳	33	疋田城跡	44	石ヶ町遺跡	55	尾尻1号墳	F	香丸山古墳南東麓



第11図 敦賀市出土土器実測図(縮尺1/4)

県埋文・市教委による分布調査や発掘によって確認しえた市内の総基数は、108基余りを数える。以下、発掘が実施された古墳を主に紹介し、未調査の古墳についても一部の主要例については説明する。

金ヶ崎古墳(第10図4)は、敦賀湾に突出する通称金ヶ崎の丘陵先端部に位置する。本古墳は、直径約19mを測る円墳である。明治42(1909)年に竪穴式石室が発見され、珠文鏡1面をはじめとする副葬品が出土している¹³。戦災を被ったため、珠文鏡以外の出土品が現存せず、詳細な内容が判明しないが、中期古墳であろう。

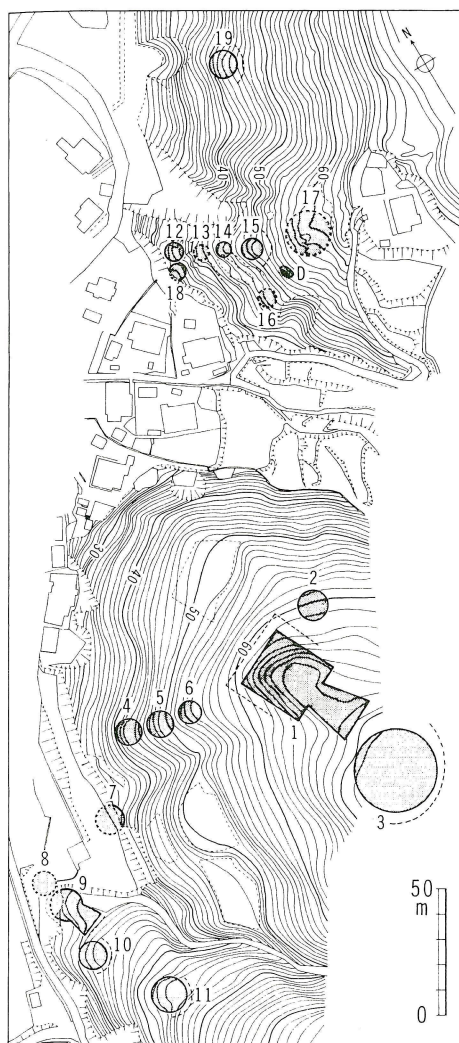
立洞古墳群¹⁴(同図18)は、井川集落北方の、木ノ芽川がまさに敦賀平野に流れ出た南岸の丘陵先端部に位置する。本古墳群

は、帆立貝形古墳の2号墳と円墳の1・3・4号墳からなる。そのうち、立洞2号墳は、昭和51(1976)年に、県教委が北陸自動車道建設に先立っての緊急発掘調査を実施した。墳丘は全長約25mを測り、二段築成で葺石をそなえ、かつ北面するきわめて短い前方部を有する。割竹形木棺から、素文鏡1面、石釧3個などが出土している。本古墳は、前期古墳である。

山の上1号墳¹⁵は、井川集落東方の丘陵先端部に位置する。県教委が、立洞2号墳と並行して緊急発掘調査を実施した。径約13.5mを測る円墳で、横穴式石室から鉄刀2口、須恵器10個などが出土している。本古墳は後期古墳である。

向出山古墳群(同図24)は、吉河集落東方の丘陵頂部ならびに山麓部に分布する。本古墳群は、造り出し付円墳の1号墳と、円墳の2～4号墳からなる。昭和29・42(1954・67)年に石井氏らが向出山1・3・4号墳の発掘調査¹⁶を、同43(1968)年に森川昌和氏が向出山1号墳の実測¹⁷を、同58(1983)年に市教委が土地造成に先立って向出山2号墳の緊急発掘¹⁸を、さらに、同59・60(1984・85)年に県埋文が、埋戻し保存にそなえて向出山1・3号墳の石室の実測を、それぞれ行っている。

丘陵頂部に位置する向出山1号墳は、径約60mを測る。墳丘は二段築成で葺石をそなえ、平野に面して南北長約18m、東西長約12mの方形の造り出しを有する。埋葬施設は、東西に並列する竪穴式石室各1基である。東方の1号石室から、仿製四神四獣鏡・不明鏡各1面、鉄地金銅装肩庇付冑1鉢、同頸甲1具、挂甲1領など多数の副葬品が出土している。西方の2号石室から、仿製四神四獣鏡1面、横矧板鈿留衝角付冑1鉢、頸甲1具、三角板鈿留短甲1領などが出土して



第12図 発掘調査区域図（縮尺 1/3,000）

いる。そのほか、墳頂部から須恵器 16 個などが出土している¹⁹。本古墳は、中期古墳である。

北接する向出山 2 号墳は、径約 16 m を測る円墳である。墳丘には葺石・埴輪を兼備しており、敦賀地域では類例が少ない古墳である。割竹形木棺の内外から、竹櫛 43 個、滑石小玉約 240 個、盾 1 張などのほか、須恵器 3 個が出土している。本古墳も中期古墳である²⁰。

山麓部に位置する向出山 3 号墳は、径約 13 m を測る円墳である。横穴式石室から、耳環 3 個、轡 2 組、須恵器 34 個などが出土している²¹。北接する向出山 4 号墳は、径約 7 m を測る円墳である。土砂の堆積で詳細は不明であるが、横穴式石室から耳環 1 個、須恵器 4 個などが出土している²²。この 2 基とも後期古墳である。

小谷ヶ洞 1・2 号墳（同図 22）は、吉河集落南方の丘陵端部に位置する。昭和 50（1975）年に、市教委が福井県原子力センター建設に先立って緊急発掘調査を実施した²³。小谷ヶ洞 1 号墳は、一辺約 20 m を測る方墳である。埋葬施設は東西に並列する木棺各 1 基で、東方の割竹形木棺（第 1 号主体）から鉈 1 本が、西方の形態不詳の木棺（第 2 号主体）から鉄剣 1 口、鉈 1 本が出土している。また、小谷ヶ洞 2 号墳は直径約 25 m を測る円墳である。割竹形木棺から乳文鏡 1 面などのほか、墳頂部から土師器 7

個余りが出土している。この 2 基は、ともに前期古墳である。

坂ノ下遺跡群に含まれる明神山古墳群（同図 26・第 12 図）は、坂ノ下東方の丘陵上および山麓に位置する。本古墳群は、これまで総数 16 基が残存していることが判明していた。昭和 60（1985）年から北群（12～16 号墳）を県埋文が、一般国道 8 号線敦賀バイパス建設に先立って緊急発掘調査を実施しており、あらたな古墳や土壙墓の存在が判明するとともに、あわせて、従来方墳かと思われてきた古墳（12～15 号墳）が円墳であることが判明した。

本古墳群は、古墳 17 基、土壙墓 1 基などからなり、それぞれの立地と分布状況から北・中央・南の 3 群に分けうる。

北群（丑寅山支群）は、円墳 6 基（12～19 号墳、第 12 図 12～19）以上、土壙墓 1 基（同図 D）

からなる。概略を記せば、各古墳は直径約 6.5 ～ 11 m を測る。12・19 号墳から土壙を、18 号墳から横穴式石室を検出している。これらは一般的に副葬品に乏しいが、土壙墓から供献用の土師器 2 個が出土している。18 号墳は 6 世紀中葉の築造であるが、そのほかの古墳は 4 世紀後葉を中心とする築造であろう。

中央群は、前方後円墳 1 基（1 号墳、同図 1）、円墳 5 基（2～6 号墳、同図 2～6）からなる。1 号墳は全長約 47 m を測る。墳丘には葺石をそなえるとともに、後方部下に基台部を有する。かつて乱掘のさい、竪穴式石室の用材かと思える石材が確認されており、4 世紀に築造した敦賀地域の首長墓であろう。3 号墳は 1 号墳に南接し、直径約 35 m を測る円墳である。その他は直径 10 ～ 14 m を測る小墳である。

南群は、前方後円墳 1 基（9 号墳、同図 9）、円墳 4 基（7・8・10・11 号墳、同図 7・8・10・11）以上からなる。9 号墳は、全長約 20 m を測る。横穴式石室をもっており、6 世紀に築造した敦賀地域の首長墓であろう。その他の古墳は、直径約 10 ～ 15 m を測る小円墳であるが、10・11 号墳は横穴式石室をもち、7・8 号墳は須恵器片が出土している。よって、本群はいずれも 6・7 世紀の築造になるものである。

衣掛山古墳群（第 10 図 30）は、笙ノ川南岸の山麓部に分布する。昭和 62（1987）年、市教委が圃場整備事業に先立って緊急発掘調査²⁴を実施し、径約 5 ～ 26 m の円墳約 40 基からなることが判明した。群内の大部分は横穴式石室をもち、馬具・須恵器などが出土している。そのほか製塩土器の出土もあり、注目に値する。本古墳群は後期群集墳である。

また、敦賀平野北西部の山麓部には、穴地藏古墳群²⁵（同図 51）が位置する。本古墳群は 3 基の小円墳からなる。そのうち穴地藏 1 号墳は径約 11 m を測り、石柵を付設した横穴式石室をもつ。他の 2 基の古墳とともに後期古墳である。

さらに、敦賀半島の縄間には 2 基の古墳が分布する。そのうち尾尻 1 号墳（同図 55）は丘陵上に位置し、昭和 59（1984）年、市教委が圃場整備事業に先立って緊急発掘調査を実施した。墳丘は既に破壊されており、副葬品も検出されなかったが、横穴式石室をもつ。後期古墳である²⁶。

奈良・平安時代の遺跡としては、櫛川遺跡（同図 48）、葉原古窯跡群（同図 3）、深山寺経塚群（同図 19）、高野遺跡（同図 16）などや、気比神宮境内遺跡（同図 9）などの存在が確認されている。

櫛川遺跡²⁷は、松原浜堤の西端に位置する。昭和 54（1979）年、渤海使に係わる松原客院擬定地として、県教委が発掘調査を実施した。客院に関連するとおぼしき遺構は発見できず、かわりに製塩炉が検出できたのみである。だが、小型儀鏡 1 面、銅銭 8 枚、銅鈴 1 個と須恵器など多様な遺物が出土している。製塩炉は古墳時代後期に遡るが、平安時代前期を中心とする遺跡である。

葉原古窯跡群は、葉原集落北方の南山麓に位置する。昭和 55（1980）年、市教委が圃場整備事業に先立って 3 基の窯跡の灰原を試掘調査した。杯・皿・蓋・甕など多数の平安時代中期の須恵器が出土しており、中でも、風字硯は注目すべき存在である。

深山寺経塚群は、深山寺集落に西接する丘陵上に位置する。本経塚群は20余基からなるという。早く経巻19巻、経筒2筒²⁸、銅鏡2面などが出土している。昭和57(1982)年、市教委が宅地造成に先立って深山寺1～7号経塚の緊急発掘調査²⁹を実施した。その結果、深山寺1号経塚からは、銅鏡11面、金銅鈴1個などが、同3号経塚からは銅鏡14面などが、その他の経塚からも蔵骨器などが、それぞれ出土している。本経塚群は、平安時代末期に造営を開始し、室町時代まで継続して営んだものと思える。

気比神宮境内遺跡は、敦賀平野北東部の砂丘上に位置する。昭和63(1988)年に礎石や古瓦が採集されており、神宮寺跡かと目されている³⁰。

なお、単独の遺物出土地であるが、本町(同図A)から奈良時代の須恵器1個が出土している。

鎌倉・室町時代の主たる遺跡には、城砦跡の確認例が多い。主なもののみあげれば、南北朝・室町時代の例として、天筒山の北西部に位置する金ヶ崎城跡³¹(同図6)、室町時代の例として正田南方の段丘上に位置する正壇城跡³²(同図33)、滋賀県境の柳ヶ瀬山頂部に位置する玄蕃尾城跡³³などがある。

また、明神山古墳群北群に重複する尾根には坂ノ下中世墓群が展開し、同古墳とともに発掘調査がなされた。蔵骨器7個体を出土し、多数の石造物を伴う北陸を代表する中世墓の調査事例といえよう。特に石を方形に巡らす区画墓が列をなす状況は貴重な事例ではないかと考えられる³⁴。

以上が、敦賀市域に所在する主要遺跡ならびに主要な調査例である。平野部における遺跡の分布に端的に現れていることであるが、これらの遺跡のうち大部分は井川から山泉にかけての東部山麓地帯に集中している。とりわけ、古代の首長層の動勢が端的に現れているといえる主要古墳の分布は、いずれも東部山麓地帯である。それに比べて、南部では南部の黒河川の扇状地が発達している。前代の遺跡は確認しえず、古墳時代も後期に至ってようやく狐塚古墳(同図35)、栗野南小学校古墳(同図36)、黒河1・2号墳(同図37)、天満神社古墳(同図39)など、若干の古墳が出現していることを注目する(第11図2～6参照³⁵)。そして西部では、沓見・原などの周辺部に低湿地の存在が顕著である³⁶。

すなわち、古代の敦賀地域に関してきわめて大局的に推断すれば、東部は比較的安定した自然的環境にあってより早くから開墾されたのに対して、南部では河川の氾濫や土砂の堆積のため、西部では低湿地の存在のため遅くまで耕地化が困難であった、感がある。そして、詳しい言及は省略するが、そのような傾向は中世においても多かれ少なかれ存在した、といっても過言ではないであろう。

このように、敦賀でも先進地帯であり、かつ、近江から越前中央部にぬける木ノ芽道が通過する東部山麓地帯の中央部に所在するのが、まさに今回調査の対象とした吉河遺跡(第10図21)である。

注

1 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第14集、1980年

- 2 浜堤は、風成砂により形成された砂丘と異なり、砂が磯浪の作用で打ち上げられ形成されたものであり、富山県放生津砂丘、石川県羽咋砂丘を類例に上げうる。
- 3 森川昌和「白木浦」(『福井県の地名』1981年)。
- 4 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第13集、1978年。
- 5 注4に同じ。
- 6 広嶋一良「松原遺跡」(『福井県における弥生式土器集成』福井考古学研究会、1970年)。なお、本文献では松原遺跡と称されているが、この松原地区内には多くの遺跡が存在するので、無用の混乱を避けるため、改称する。
- 7 注1に同じ。
- 8 前田 優氏の教示による。
- 9 石井左近氏の教示による。
- 10 山本昭治氏の教示による。
- 11 池田雄二氏の教示による。
- 12 石井左近『敦賀市通史』1956年。
- 13 梅原末治「続越前敦賀郡の遺物と遺跡」(『考古学雑誌』第7巻第1号)。
- 14 注4に同じ。
- 15 注4に同じ。
- 16 石井左近「向出山古墳出土品」(『敦賀市文化財』第2集、1960年)。
- 17 森川昌和「向出山古墳をめぐる」(『別冊 氣比史学』第2号、1981年)。
- 18 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡調査ニュース』4、1983年。
- 19 本古墳の出土品については注16で報告されているが、一般に異説が多いのが実情である。そこで、山口 充と中司が改めて整理を行い、注4文献で報告した。ただ、1号石室出土の金銅装眉庇付冑は復原品によって2鉢と記したが、うち1鉢は問題を残すので除外する。なお整理にあたっては、石井左近氏のご配慮と早稲田大学考古学研究会の学生諸氏の協力を得た。
- 20 注18に同じ。
- 21 注4に同じ。
- 22 注4に同じ。
- 23 森川昌和「敦賀の開発と発展」(『敦賀市史』通史編上巻、1985年)。
- 24 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群』1988年。なお、本古墳群の総基数については、発掘調査を経たものの以外の、周辺に分布する古墳をも含めた数である。
- 25 斎藤 優「穴地藏古墳」(『文化財調査報告』第27集、1979年)。
- 26 池田雄二氏の教示による。
- 27 一般にはやはり松原遺跡と称されている。注6と同様な理由でここでは改称する。調査結果については、山口 充氏の教示による。

第2節 歴史的環境

- 28 京都大学文学部『京都大学文学部博物館 考古学資料目録』第2部 日本歴史時代、1968年。
- 29 前田 優「深山寺経塚群」(『昭和57年度発掘調査報告会資料』福井考古学会・若狭考古学研究会、1983年)。
- 30 久保智康氏の教示による。
- 31 敦賀市教育委員会『図録 敦賀の文化財』1988年。
- 32 注31に同じ。
- 33 福井県教育委員会『文化財調査報告』第28集、1987年。
- 34 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『年報－2－昭和61年度』1988年。
- 35 実測にあたっては、敦賀市立歴史民俗資料館や前田 優、池田雄二(以上、敦賀市教委)荒川 史、木原光(以上、富山大学人文学部学生)などの各氏のご協力を得た。
- 36 原周辺部については、その一部が貯木用の池として現在用いられており、存在が確かである。また、沓見周辺部については、かつて圃場整備事業に伴い排水路が掘削された際、広範囲で水田の耕作土下に泥炭層が存在することを確認している。

第2表 敦賀市内出土土器観察表

器形	土器番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
甕	1	口径 10.1 器高 10.8	・口縁部は外面に稜を形作って内湾気味に外上方に立ち上がり、端部が内傾面をなす。 ・頸部外面に波状文を巡らす。 ・体部外面は2条の稜線で肩部・胴部・底部に三分割し、胴部に工具による連続斜行刺突文を巡らす。	・内外面とも横ナデ調整する。 ・底部内面には当具痕が残る。	・砂粒をほとんど含まない。	灰色	・口頸部の過半を欠失する。 ・沓丸山古墳山麓出土。 ・口頸部内面と底部内面に自然釉がかかる。
坏壺	2	口径 12.2 器高 3.8	・天井部と口縁部とを分ける稜は痕跡となる。 ・口縁端部は内傾面をなす。	・内面と口縁部外面は横ナデ調整する。 ・天井部外面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	暗灰色	・ほぼ完形品。 ・天満神社古墳出土。
坏	3	口径 12.0 器高 4.6	・口縁端部は丸くおさめる。 ・底部外面は平らである。	・底部外面を除く内外面は横ナデ調整する。 ・底部外面は不調整である。	・砂粒をごくわずかに含む。 ・焼成良好	暗灰色	・ほぼ完形品。 ・天満神社古墳出土。 ・重ね焼きのため受部に坏口縁端部の一部が融着する。
無蓋高杯	4	口径 10.3 器高 4.6	・坏部外面は2条の稜線で口縁部・体部・底部に三分割し、体部に工具による連続斜行刺突文を巡らす。	・内外面とも横ナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	黒灰色	・脚部を欠失する。 ・栗野南小学校古墳出土。
	5	口径 11.6 底径 11.7 器高 15.5	・坏部外面は上から各2条・1条の稜線で口縁部・体部・底部に三分割する。 ・脚部外面も2条の稜線で上段・中段・下段に三分割し、上・中段には長方形の三方透かし孔をあけている。	・内外面とも横ナデ調整する。	・砂粒をほとんど含まない。 ・焼成良好	黒灰色	・ほぼ完形品。 ・栗野南小学校古墳出土。
長頸壺	6	口径(11.6) 胴径 14.8 器高(19.0)	・口縁部は外湾しながら外上方に立ち上がる。 ・腰部と底部の境の外面には明確な稜を形作る。	・肩部より上の外面と内面は横ナデ調整する。 ・胴部・底部外面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	黒灰色	・口縁端部を欠失する。 ・栗野南小学校古墳出土。 ・頸部～胴部外面に濃緑色の自然釉が厚くかかる。

第3章 遺 構

第1節 遺構序説

吉河遺跡において検出した遺構の数は、きわめて多い。それらの遺構は、東西に平行して北流する2条の浅い大型の溝（自然河道）に挟まれた、内部地区に主に分布している。本遺跡は、北部の「住居域」と南部の「墓域」とからなる。ただし、住居域と墓域とは截然と分かれているわけではなく、その一部は重複して、住居域の南端部と墓域の北端部とは重なっている。そこで、この重複する地区のみを限定して指す場合には、「住居・墓混在域」と呼び分ける。

まず、住居域は、北西部が未発掘のため断定しがたいが、全域は発掘面積に倍するものとみられ、おおむね南北長約110m、東西幅約50mの範囲におよぶとみてよからう。検出遺構には、竪穴住居・掘立柱建物・土塋・溝のほか、柱穴群などが存在する。これらは重複が激しく、その密度はきわめて高い。なお、遺跡の東辺をなす溝（自然河道）のより東域にも、掘立柱建物・土塋・溝など一部の遺構が存在するが、住居域に比べるとその密度は低い。

一方、墓域も南端部が現有の農道と重なっていて発掘が不可能であったため、なお一部に懸念を残すが、ほぼ南北長105m余、東西の最大幅約50mの範囲におよぶとみてよからう。検出遺構には、墓道・方形周溝墓・土塋墓などが存在し、住居域に比べると遺構の重複は少ない。墓域内は、その大部分を方形周溝墓群が、北端部を土塋墓群が占めている。ちなみに、住居・墓混在域は、ほぼこの土塋墓群が占拠する墓域北端部に相当する。

主要な検出遺構の数は次の通りであり、いずれも弥生時代中・後期に属する。

- | | | | | | | |
|----------|------|-----------|----|-------|-----------|------|
| (1) 竪穴住居 | 6棟 | (2) 掘立柱建物 | 8棟 | (3) 土 | 塋 | 345基 |
| (4) 溝 | 109条 | (5) 墓 | 道 | 6条 | (6) 方形周溝墓 | 25基 |

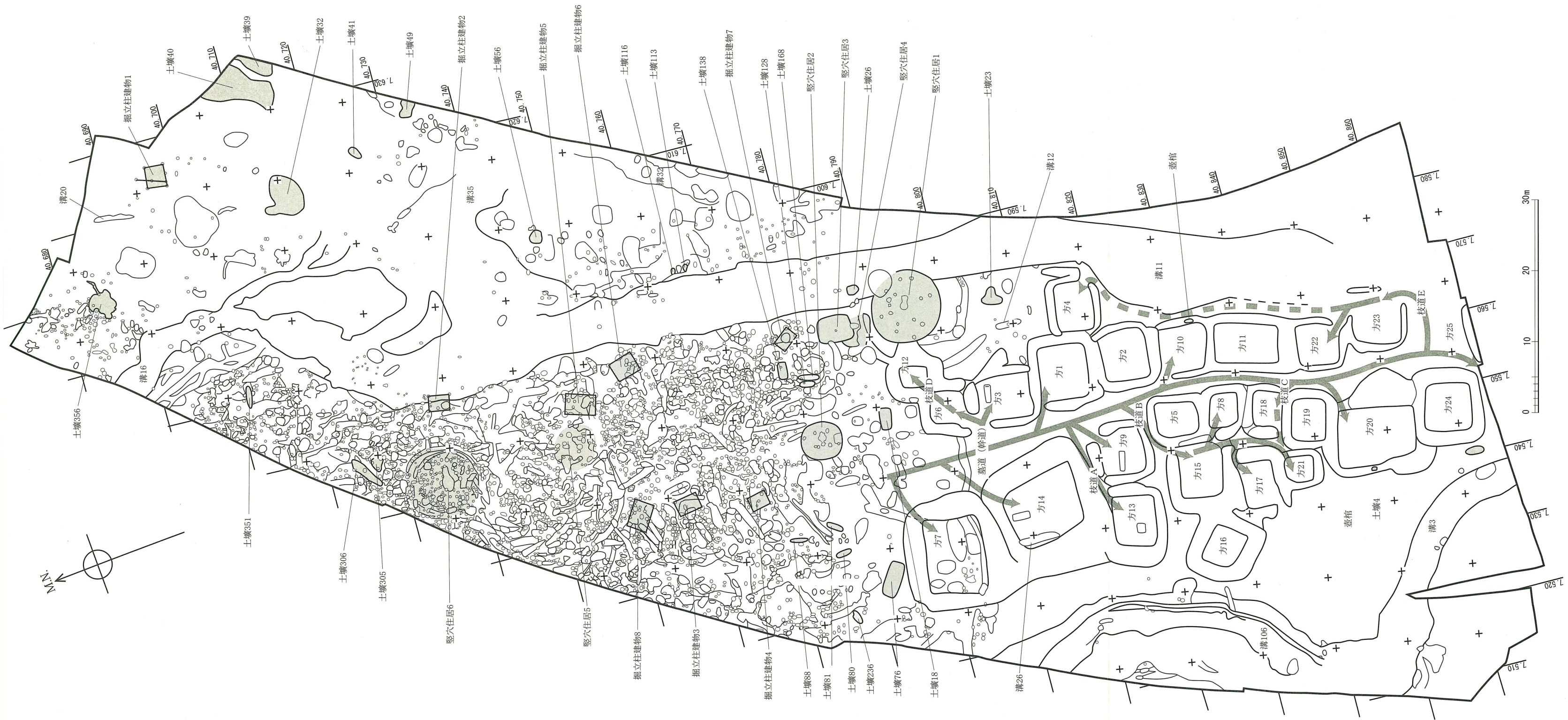
第2節 遺構各説

1 竪穴住居

竪穴住居は、住居域の中央東部に2棟が、住居・墓混在域の東部に4棟が存在し、6棟を数える。規模には大型と小型が、平面形には円形と隅丸方形のそれぞれ2種がある。

竪穴住居1（図版第7、第22図） 住居・墓混在域の東部（12H区）にあって、東部で溝11、土塋25と重複し、北部には竪穴住居3・4が、西部には方形周溝墓12が隣接する住居である。

平面形がほぼ円形を呈する大型住居で、規模は、東西径約9.8m、南北径約9.5mを測る。壁高は、確認面から約15cmを測る。壁に沿って、幅約20～40cm、深さ約7cmを測る壁溝が巡る。東部の遺構が重複する部分では壁溝を欠くが、本来は全周していたと思える。また、東南部を除く壁溝内には、径約10cmを測る小穴が25個存在し、不規則な間隔で並ぶ。住居の中央部には、埋土に炭化物を多く含む土塋が存在するが、明確な炉は存在しない。柱穴は、ほぼ等間隔に並び、径約50～80cm、深さ約17～30cmを測る主柱穴6本（ $P_1 \sim P_6$ ）と、その2～3m内側に並び、径約30

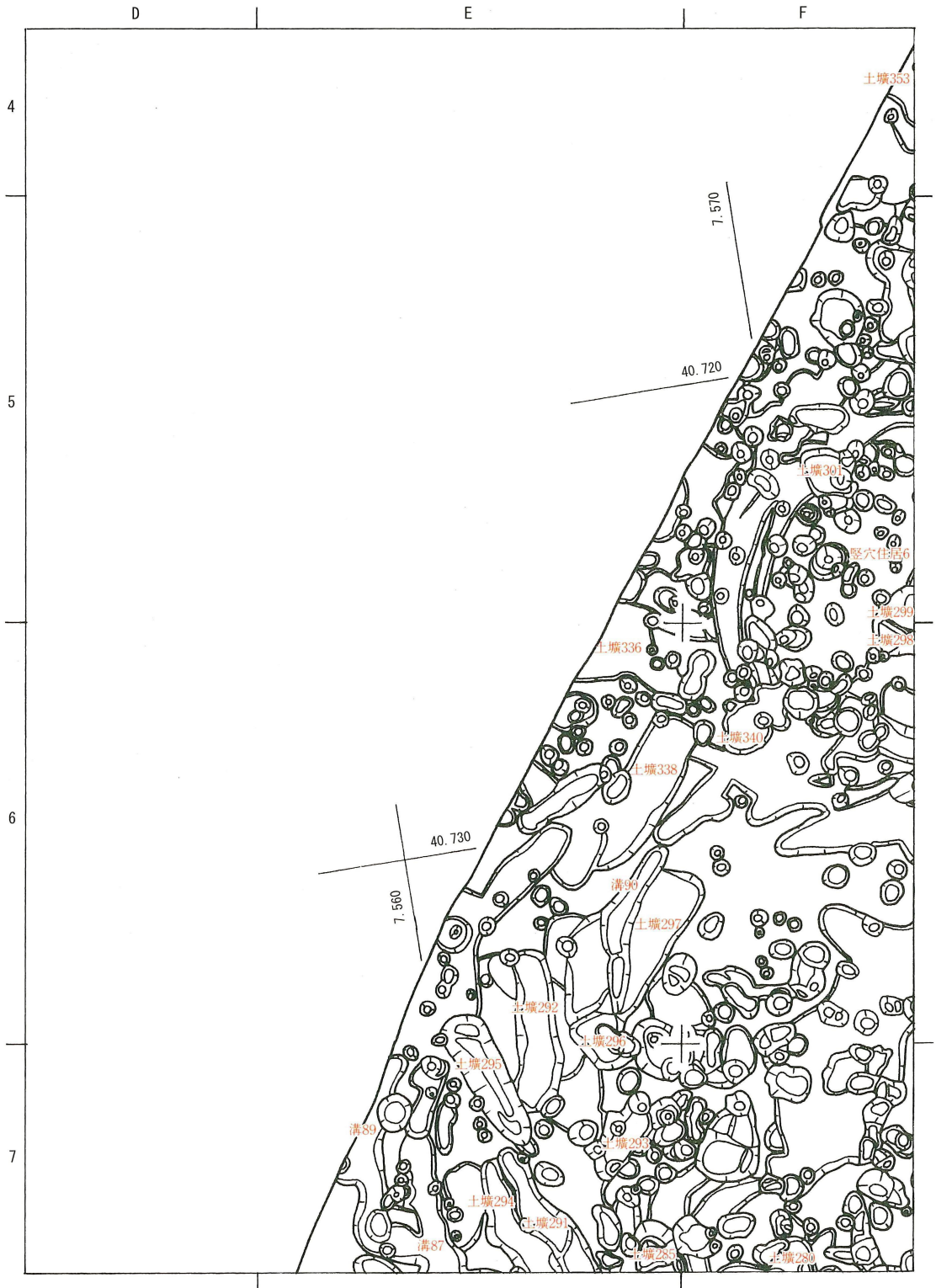


第 13 図 遺構分布図 (縮尺 1/500)

第2節 遺構各説



第14図 住居域遺構平面図1(縮尺 1/150)



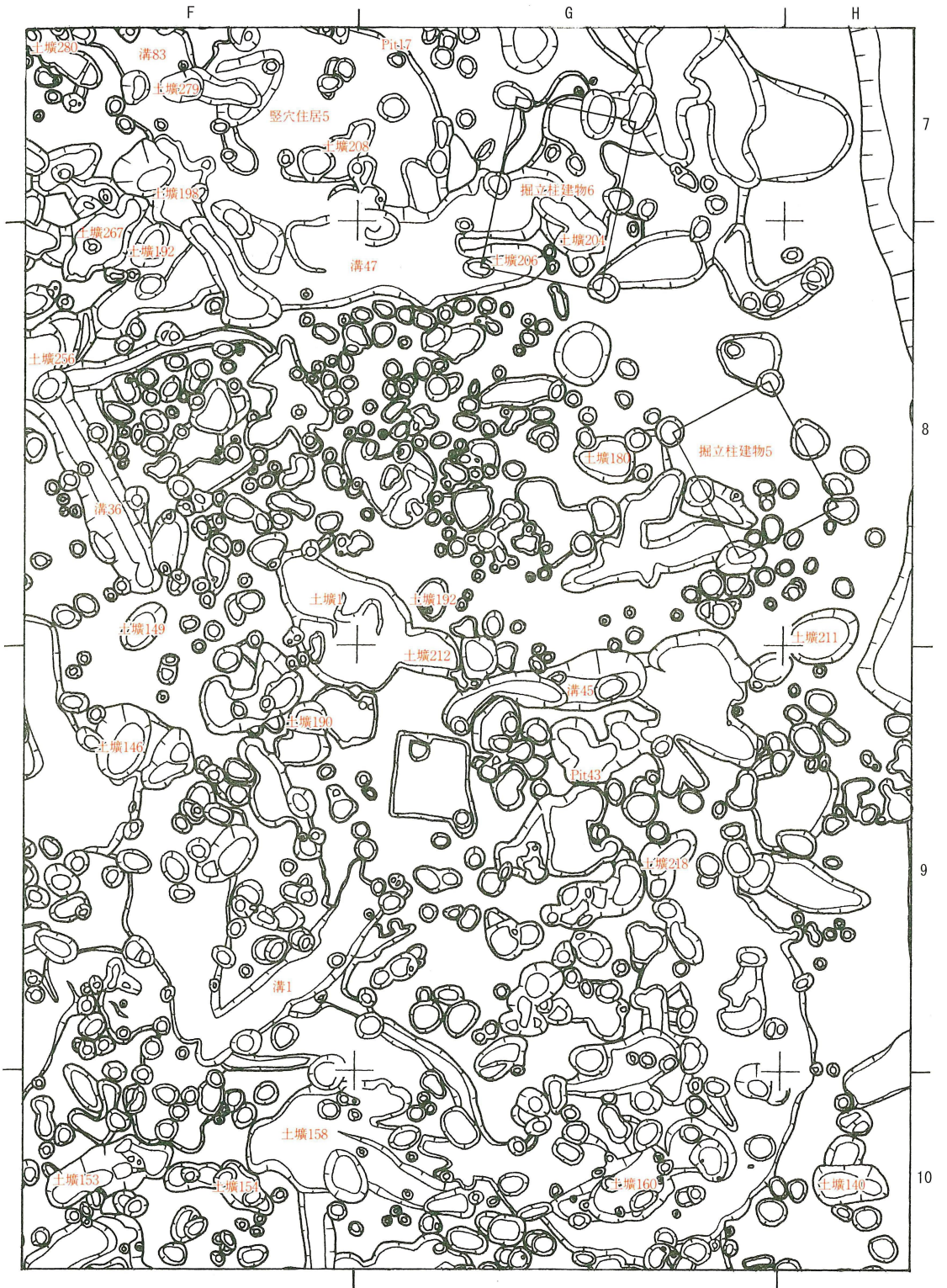
第15図 住居域遺構平面図2(縮尺1/150)



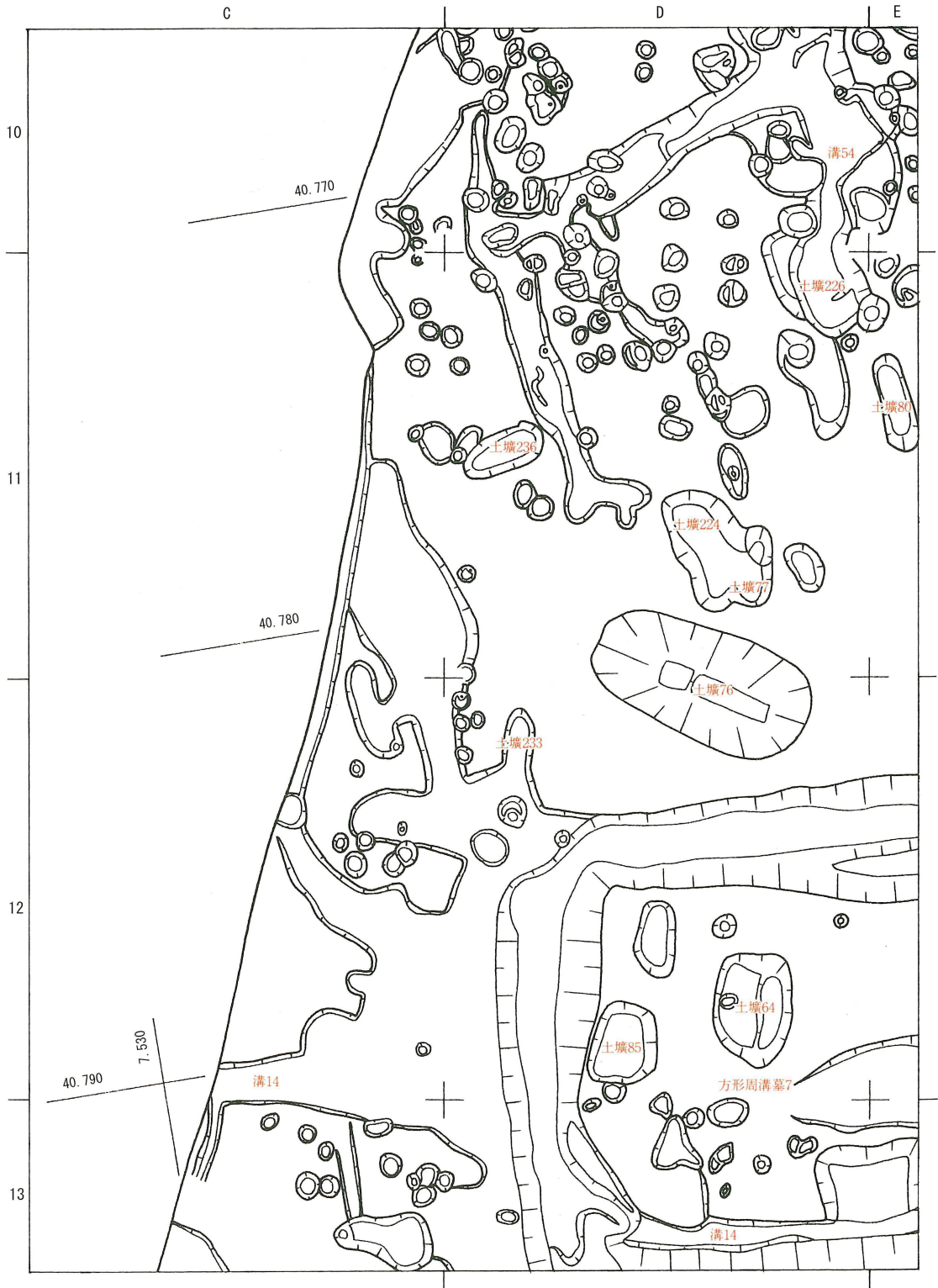
第16図 住居域遺構平面図3(縮尺1/150)



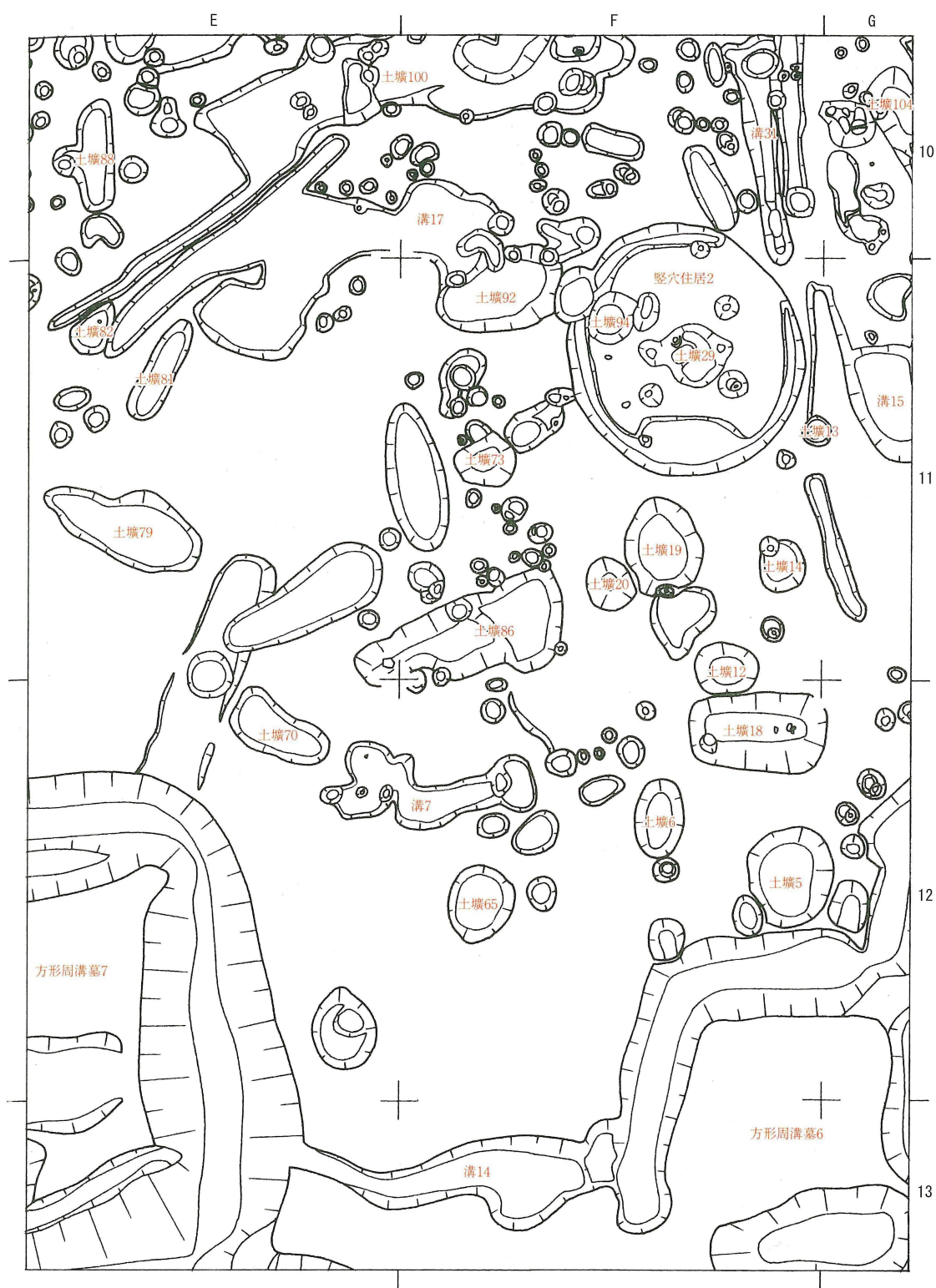
9



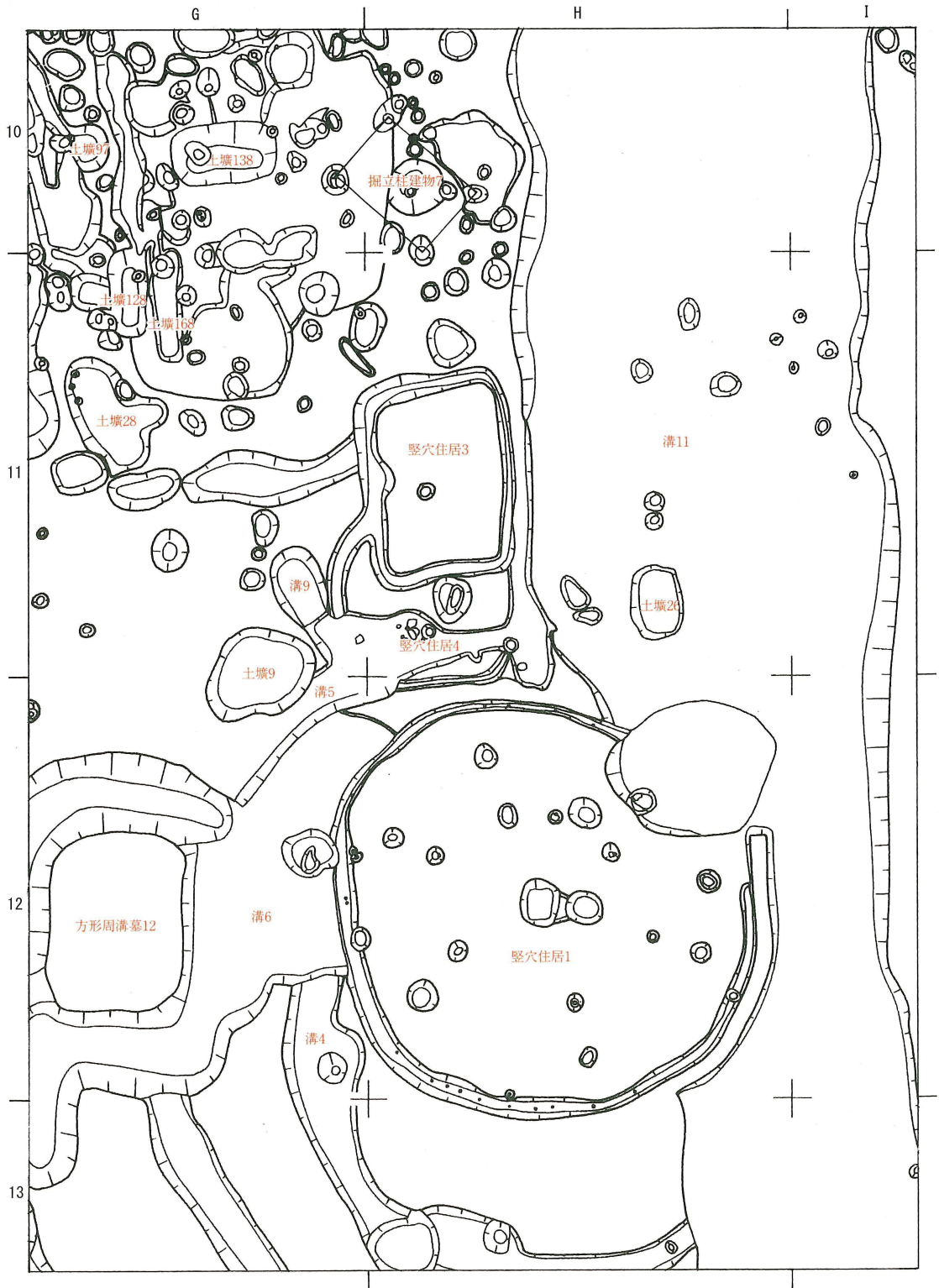
第18図 住居域遺構平面図5(縮尺1/150)



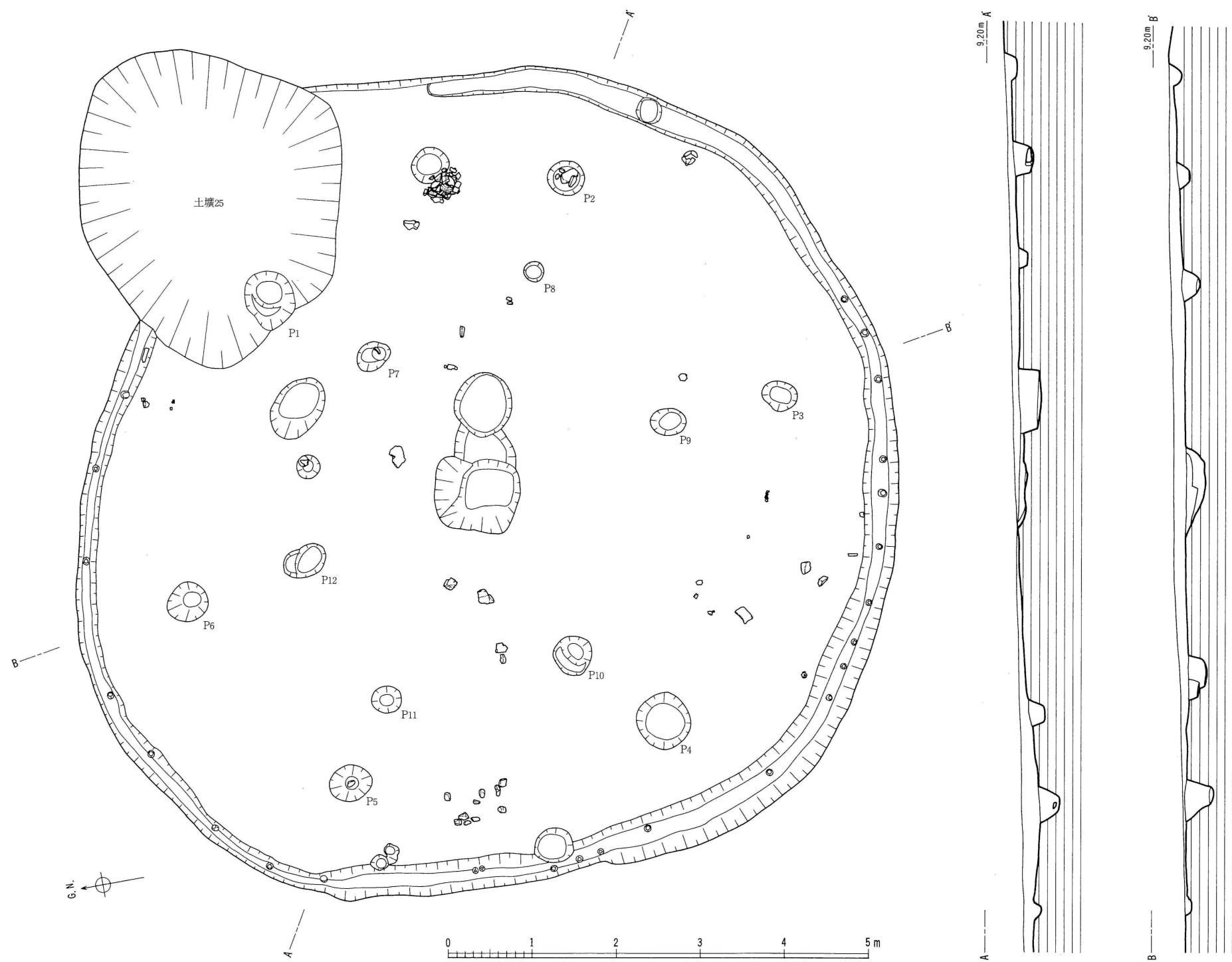
第19図 住居域遺構平面図6(縮尺 1/150)



第20図 住居域遺構平面図7 (縮尺 1/150)



第 21 図 住居域遺構平面図 8(縮尺 1/150)

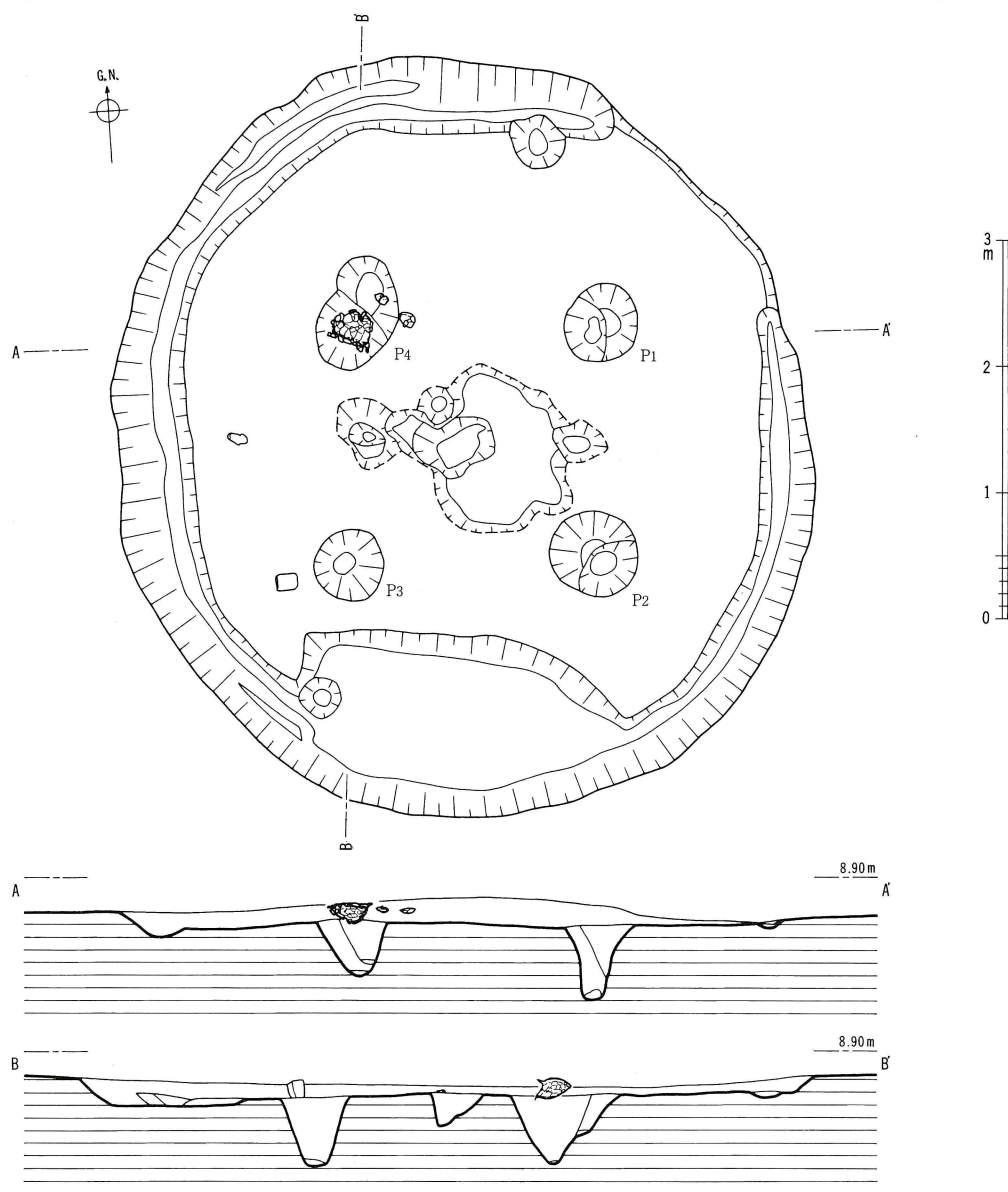


第 22 図 縦穴住居1実測図（縮尺 1/60）

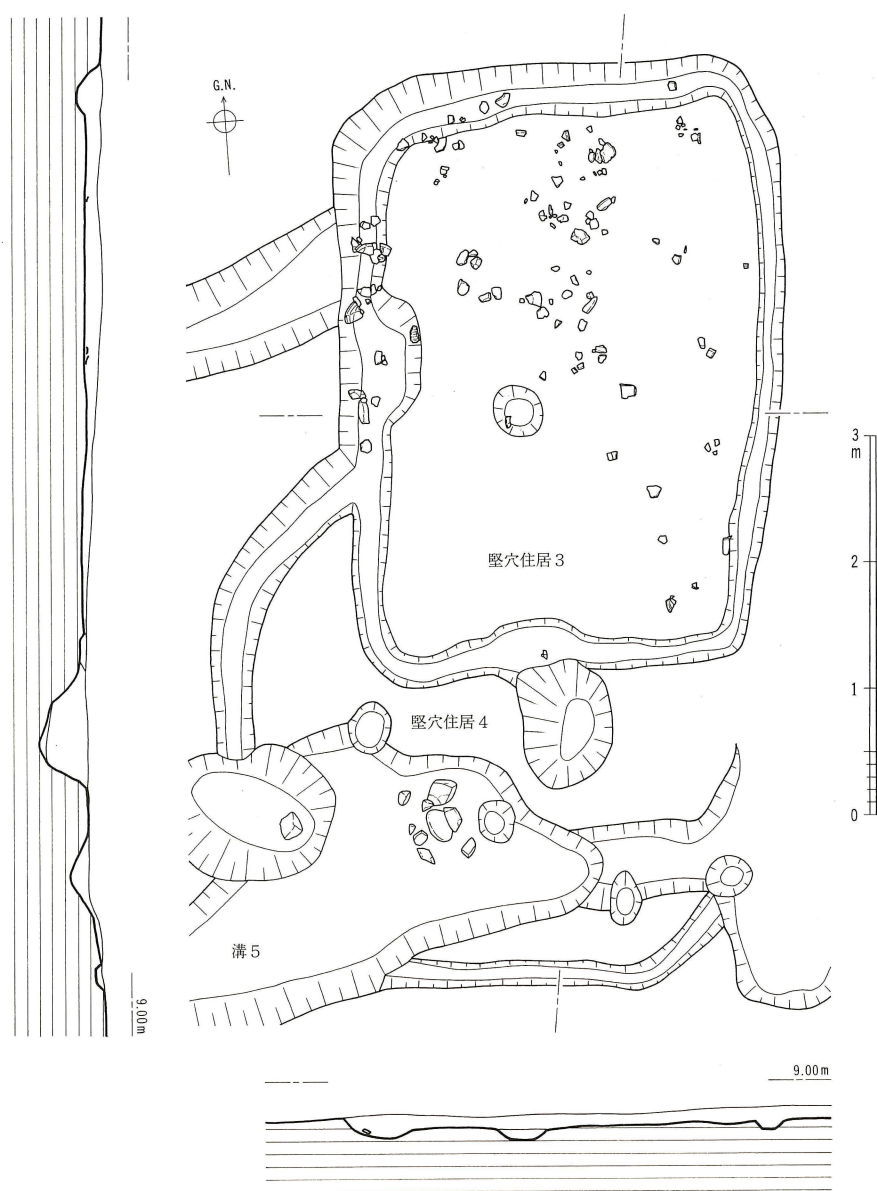
第2節 遺構各説

～60cm、深さ約10～20cmを測る支柱穴6本（ $P_7 \sim P_{12}$ ）を数える。住居中央の土壇は、平面形が隅丸方形を呈し、東西約85cm、南北約100cm、深さ約25cmを測る。東に隣接する径約70cm、深さ約25cmの土壇とは、浅い土壇状の落ち込みを介して連結する。住居の南および北外周に巡る溝4・5は、本住居に伴う排水用の溝（外周溝）の可能性が強い。出土遺物には、土器5個、2次加工のある剥片1個、砥石2個、軽石2個などがある。本住居の時期は、後期である。

竖穴住居2（図版第8、第23図） 住居域の南端部（10・11F区）に位置する住居である。平面形が円形を呈する住居で、規模は、東西径約5.5m、南北径約5.9mを測る。壁高は、検出



第23図 竖穴住居2実測図（縮尺1/60）



第24図 竪穴住居3・4実測図（縮尺1/60）

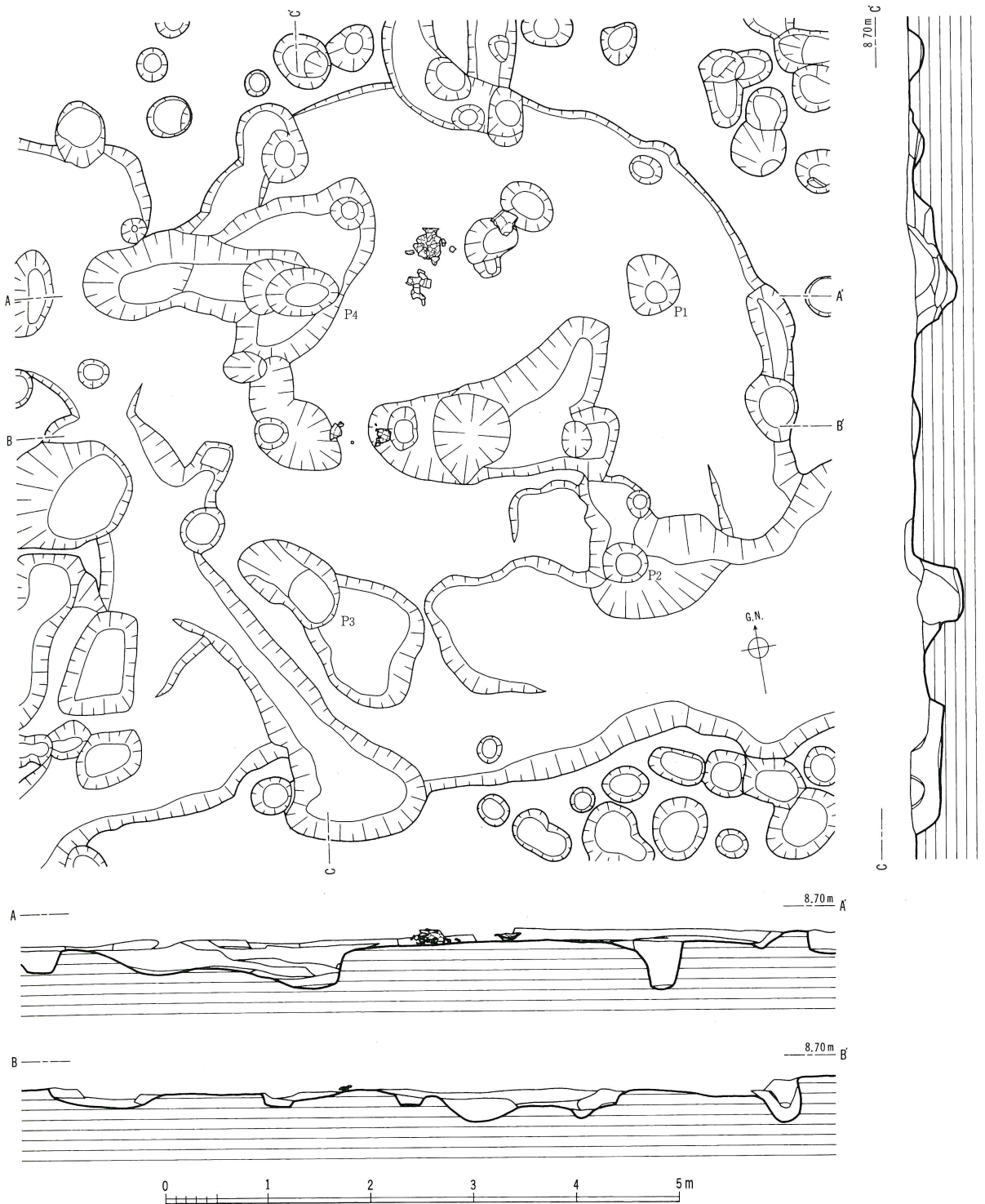
P_4 は、それぞれ2本ずつが重複する。住居中央部の土壌は、平面形が不整形を呈すが底面は平坦で、長軸約70cm、深さ約30cmを測る。主要な出土遺物には、土器3個、打製石鏃1個、磨製石鏃1個、メノウフレイク1個などがある。本住居の時期は、中期後半である。

竪穴住居3（図版第9、第24図） 住居・墓混在域の東部（11H区）にあって、南部が竪穴住居4と重複する住居である。

平面形が隅丸長方形を呈する小型住居で、規模は、東西長約3.5m、南北長約4.7mを測る。壁

面から約15cmを測る。壁に沿って幅約20～60cm、深さ約10cmを測る壁溝が巡るが、北東部では途切れる。また、南部で東西長約250cmにわたり、幅が約140cmに拡張され、出入口施設の可能性をもつ。住居の中央部には、埋土上層に炭化物を多く含む土壌が存在するが、明確な炉は存在しない。支柱穴は、径約50～90cm、深さ約35～45cmを測る4本（ $P_1 \sim P_4$ ）を数える。

また、 $P_1 \cdot P_2 \cdot$



第25図 竪穴住居5実測図(縮尺1/60)

高は、検出面から約 12cm を測る。壁に沿って幅約 20 ～ 50cm、深さ約 10cm を測る壁溝が全周する。この壁溝は、西辺中央で若干内側へ張り出している。炉は存在しない。住居中央部西寄りに、径約 40cm、深さ約 10cm を測るピット 1 本が存在する。

主要な出土遺物には、土器片多数、土玉 1 個などがある。本住居の時期は、後期である。

竪穴住居 4（図版第 9、第 24 図） 住居・墓混在域の東部（11G・H 区）にあって、北部が竪穴住居 3 と、南部が竪穴住居 1 の外周溝の可能性のある溝 5 と重複する住居である。この重複のため、規模および平面形の詳細には不明な点が多い。

平面形が隅丸方形を呈する小型住居で、規模は、東西長約 4.8 m、南北長約 4.3 m を測る。壁高は、検出面から約 18cm を測る。壁に沿って幅約 20 ～ 40cm、深さ約 10cm を測る壁溝が巡っていたものと思われ、北西部と南部に遺存する。主柱穴は、不明である。

本住居は、出土遺物が少なく時期は未詳であるが、平面形から後期である可能性が高い。

竪穴住居 5（図版第 10、第 25 図） 住居域の東部（7・8F・G 区）にあって、溝 47 をはじめ多数の土壌や柱穴が重複する住居である。重複のため、規模および平面形の詳細には不明な点が多い。平面形が円形を呈する住居で、規模は、東西径約 7 m、南北径約 7 m を測る。壁高は、検出面から約 10cm を測る。壁溝は、東縁において極めて部分的に存在し、長さ約 80cm、幅約 30 ～ 55cm、深さ約 15cm を測る。住居の中央部には不整形の土壌が存在するが、明確な炉は存在しない。ちなみに、本住居に東接して屋外炉が存在する。主柱穴は、径約 70 ～ 100cm、深さ約 35 ～ 40cm を測る 4 本（ $P_1 \sim P_4$ ）を数える。

主要な出土遺物には、土器 6 個、打製石鏃 1 個、石錐 2 個、2 次加工のある剥片 2 個、砥石 2 個がある。本住居の時期は、後期である。

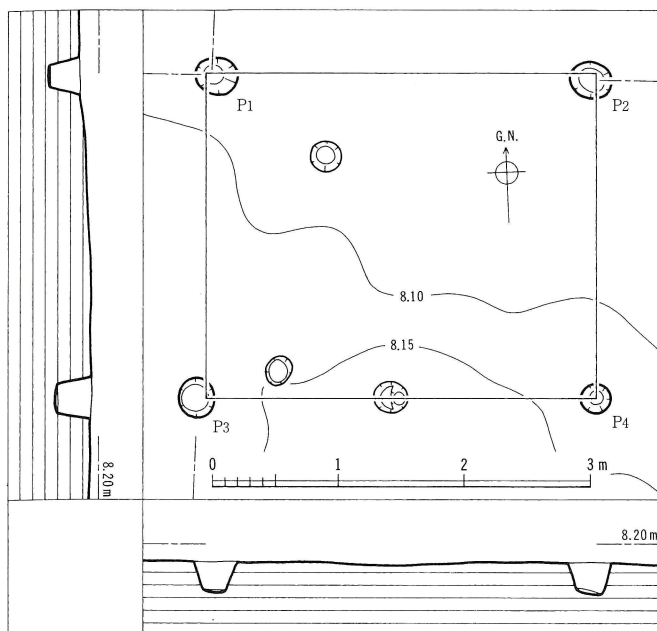
竪穴住居 6（図版第 11、第 26 図） 住居域の東部（5・6F・G 区）にあって、多数の土壌・溝・柱穴が重複する住居である。

平面形が円形を呈する大型住居で、2 回の拡張が行われている。最初は同心円状に、次は北方へ向けて、それぞれ拡張する。規模は、古段階が東西径約 8.7 m、南北径約 9.8 m、第二段階が東西径約 10.1 m、南北径約 10.3 m、最終段階が東西径約 10.1 m、南北径約 11.2 m を測る。最終段階における壁高は、検出面から約 10cm を測る。壁に沿って、幅約 30 ～ 70cm、深さ約 10cm の壁溝が巡り、拡張にあわせて 3 本存在する。主柱穴は、古段階が径約 40 ～ 70cm、深さ約 30 ～ 50cm を測る 4 本（ $P_1 \sim P_4$ ）であり、最終的には、壁溝際に近接した位置に存在し径約 40 ～ 70cm、深さ約 10 ～ 50cm を測る 11 本（ $P_5 \sim P_{15}$ ）となる可能性がある。また、柱穴のうち径約 48 ～ 56cm、深さ約 15 ～ 50cm を測る 6 本（ $P_{16} \sim P_{21}$ ）は、1 間 × 2 間の掘立柱状に並び、本住居に伴う出入口部施設の可能性を持つ。なお、 $P_{22} \sim P_{24}$ には、柱根が遺存する。住居中央部には、埋土に炭化物を多く含む不整形の土壌 298 ～ 300 が存在するが、明確な炉は存在しない。

主要な出土遺物には、打製石鏃 12 個、石包丁 2 個、太型蛤刃石斧 3 個、柱状片刃石斧 1 個、扁平片刃石斧 1 個、石錐 1 個、2 次加工のある剥片 10 個、砥石 1 個、軽石 1 個、管玉未成品 4 個、



第 26 図 竖穴住居 6 実測図 (縮尺 1/60)

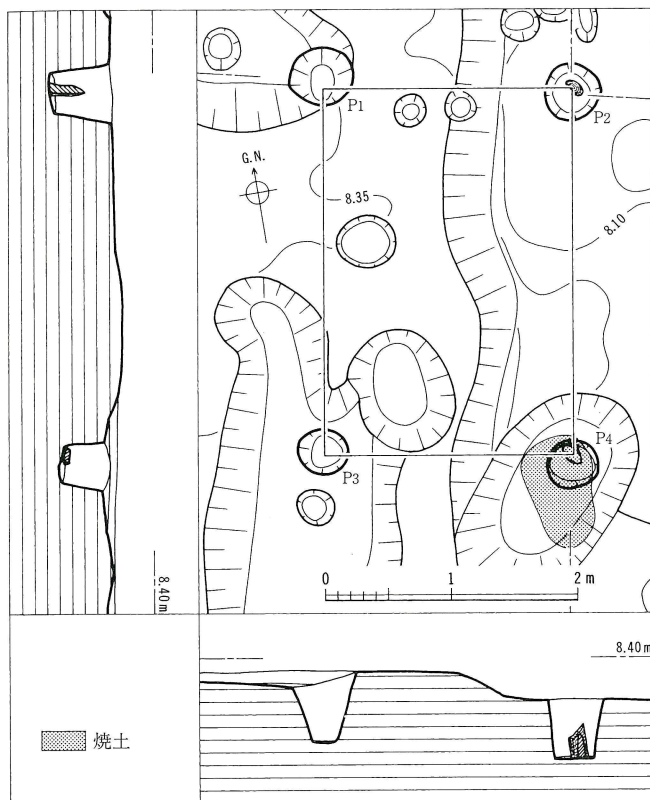


第27図 掘立柱建物1実測図(縮尺1/60)

碧玉17個、玉錐1個、石鋸10個がある。このうち、玉作に関連する管玉未成品2個、碧玉5個、石鋸3個は、住居中央部の土壌から出土している。本住居は、玉作り工房である可能性が高い。本住居の時期は、中期である。

2 掘立柱建物

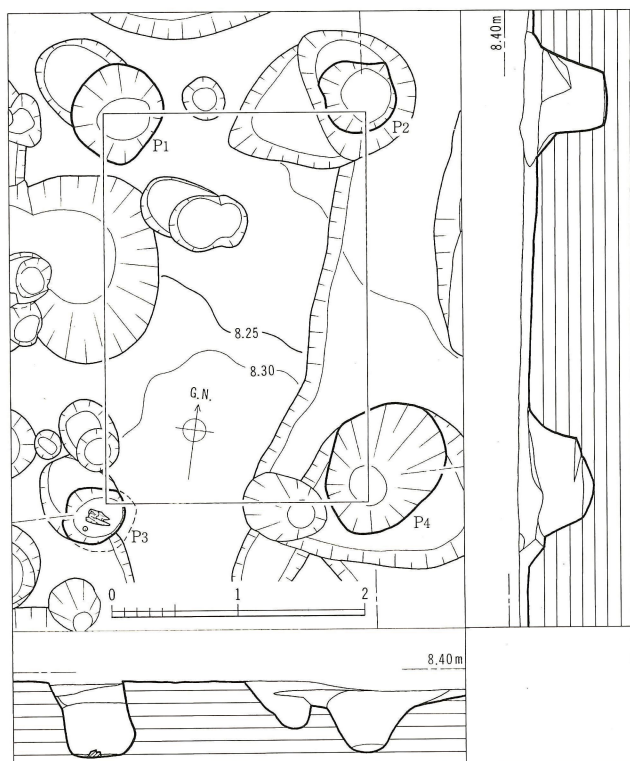
掘立柱建物は、主に住居域に散在し、8棟を数える。これらの建物の柱間には、1間×1間、1間×2間の二種類があり、前者は5棟(掘立柱建物1～4・7)、後者は3棟(同5・6・8)を数える。



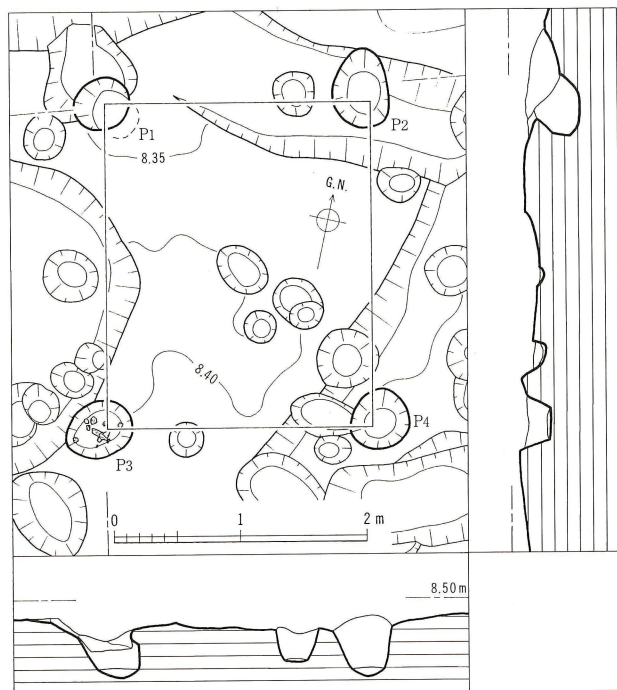
第28図 掘立柱建物2実測図(縮尺1/60)

掘立柱建物1(図版第12、第27図) 調査区域北端部(2K区)にあって、 $P_1 \sim P_4$ で構成する1間×1間の建物である。桁行は約3.1m、梁行は約2.5mを測る。桁方向は $N-87^\circ-W$ である。柱穴の掘方は円形を呈し、径約27～35cm、深さ約23～36cmを測る。本建物の時期は、後期である。

掘立柱建物2(図版第12、第28図) 住居域の東端部(5・6G区)にあって、 $P_1 \sim P_4$ で構成する1間×1間の建物である。桁行は約3.0m、梁行は約2.0mを測る。桁方向は、 $N-9^\circ-E$ である。柱穴の掘方は略円形を呈し、径約38～60cm、深さ約55～70cmを測る。 P_2 には柱根が、 P_4 には礎石と考える川原石1個が、底部に遺存



第29図 掘立柱建物3実測図(縮尺1/60)



第30図 掘立柱建物4実測図(縮尺1/60)

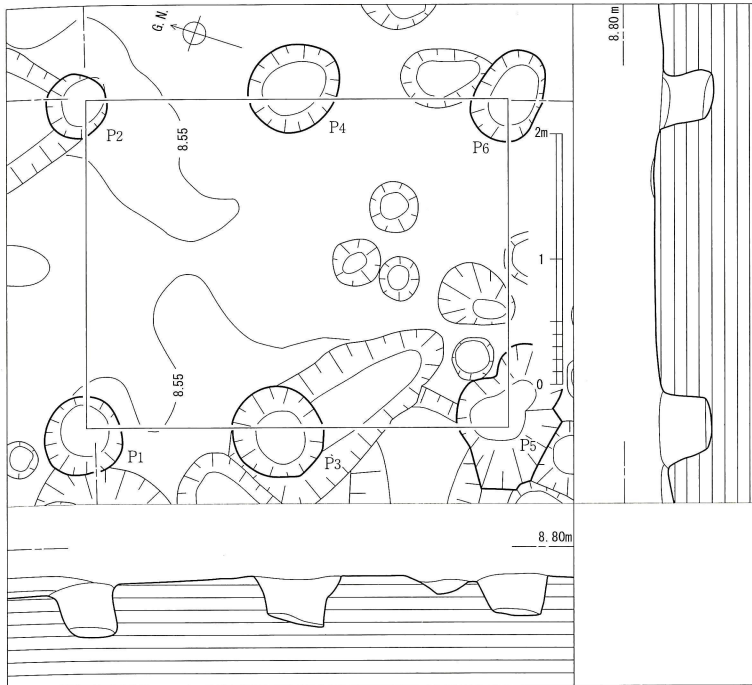
する。また、 P_4 の埋土上面には、南北約90cm、東西約60cmの範囲で、焼土が見られた。本建物の時期は、後期である。

掘立柱建物3(図版第13、第29図)
住居域の南部中央(9E・F区)にあって、 $P_1 \sim P_4$ で構成する、1間×1間の建物である。桁行は約3.2m、梁行は約2.1mを測る。桁方向は、 $N-8^\circ-W$ である。柱穴の掘方は略円形を呈し、径約75～112cm、深さ約55～70cmを測る。 P_3 の底部には、柱根が遺存する。本建物の時期は、後期である。

掘立柱建物4(図版第13、第30図)
住居域の南部(10E区)にあって、 $P_1 \sim P_4$ で構成する、1間×1間の建物である。桁行は約2.6m、梁行は約2.1mを測る。桁方向は、 $N-13^\circ-W$ である。柱穴の掘方は、略円形を呈し、径約48～80cm、深さ約25～50cmを測る。 P_3 の埋土より、土器片が出土している。本建物の時期は、未詳である。

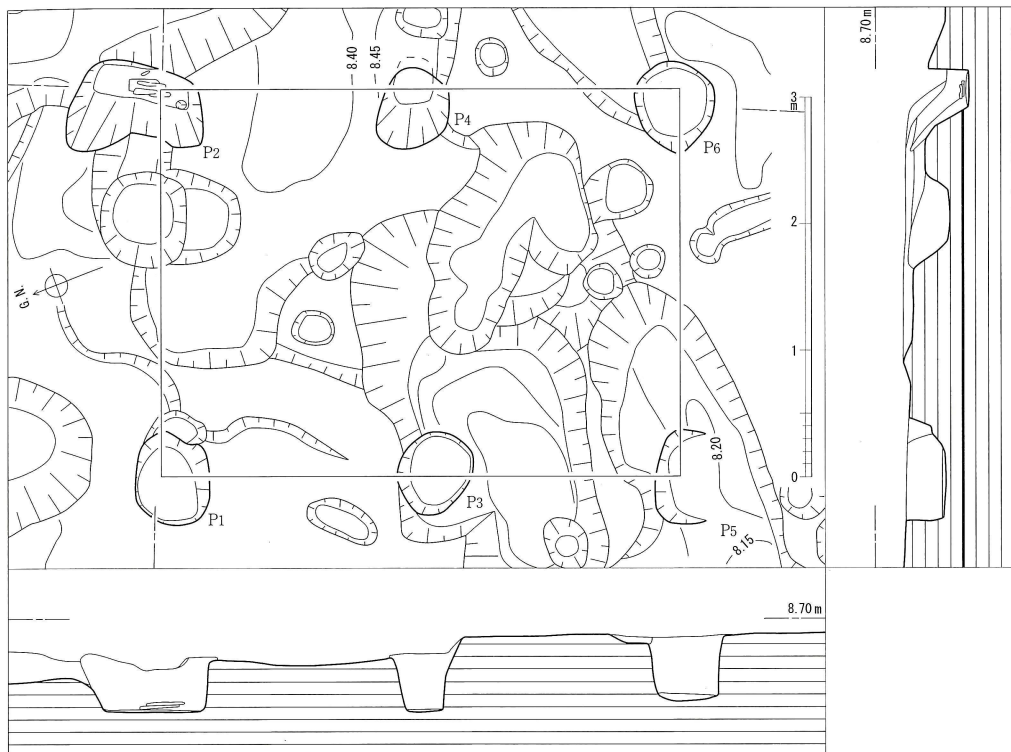
掘立柱建物5(図版第14、第31図)
住居域の東部(8G・H区)にあって、竪穴住居5の東に隣接し、 $P_1 \sim P_6$ で構成する、1間×2間の建物である。桁行約3.4m、梁行約2.6mを測る。桁方向は、 $N-17^\circ-W$ である。柱穴の掘方は、略円形を呈し、径約60～116cm、深さ約35～50cmを測る。本建物の時期は、未詳である。

掘立柱建物6(図版第14・15、第

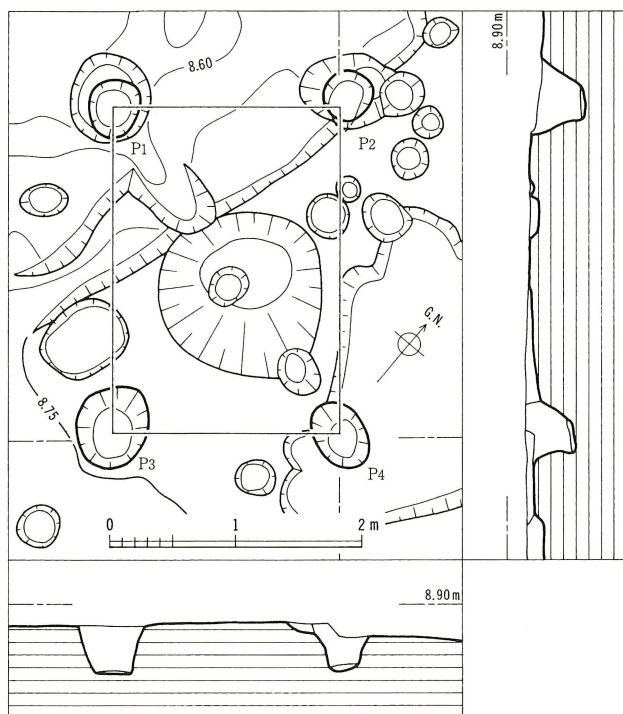


第31図 掘立柱建物5実測図（縮尺1/60）

32図）住居域の東端部（7・8G区）にあって、
 竪穴住居5に東接し、 P_1 ～ P_6 で構成する1間×2
 間の建物である。桁行は
 約4.2m、梁行は約3.2m
 を測る。桁方向は、 $N-21^{\circ}-E$ である。柱穴の
 掘方は、略円もしくは不
 整楕円形を呈し、径約65
 ～110cm、深さ約45～
 65cmを測る。 P_2 には、礎
 板が遺存する。本建物の
 時期は、後期の可能性が
 ある。



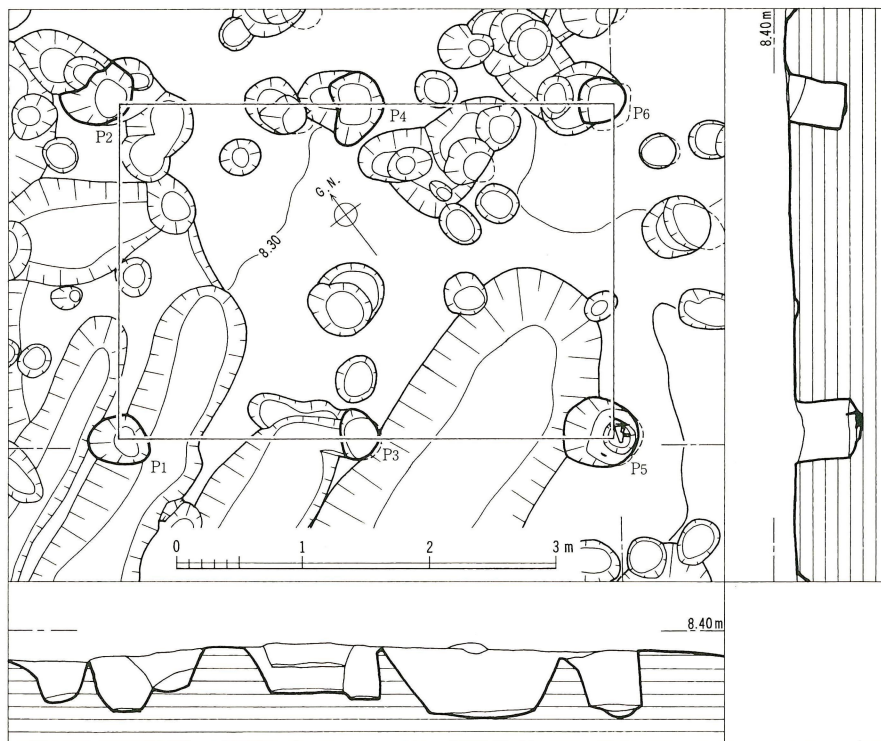
第32図 掘立柱建物6実測図（縮尺1/60）



第33図 掘立柱建物7実測図(縮尺1/60)

掘立柱建物7(図版第15、第33図) 住居・墓混在域の東端北部(10G・H区)にあって、竪穴住居3の北に位置し、 $P_1 \sim P_4$ で構成する1間×1間の建物である。桁行約2.7m、梁行約1.9mを測る。桁方向は、 $N-40^\circ-W$ である。柱穴の掘方は略円形を呈し、径約40～70cm、深さ約40～55cmを測る。本住居の時期は、未詳である。

掘立柱建物8(図版第16、第34図) 住居域中央部(8E区)にあって、 $P_1 \sim P_6$ で構成する1間×2間の建物である。桁行約4m、梁行約2.7mを測る。桁方向は、 $N-53^\circ-W$ である。柱穴の掘方は略円形を呈し、径約36～56cm、深さ約45～



第34図 掘立柱建物8実測図(縮尺1/60)

55cmを測る。 P_6 では、小板材など木片数点が出土している。本住居の時期は、未詳である。

3 土壙

ここでは、土壙について報告を行う。土壙には、土壙墓や土器廃棄土坑など、機能が異なるものが含まれている。すべての土壙について報告を行うことは紙幅の関係上不可能なため、ここでは主に土壙墓と、特徴的な土壙について報告を行う。なお、詳述できない土壙については観察表を参照していただきたい。

土壙4（図版第17、第35図） 墓域南端部（20E区）、方形周溝墓24の西方に位置する。平面形が南北に長い不整楕円形で、縦・横断面形とも逆台形をなす小型土壙墓である。その規模は、上端の長さ約2.5m、同幅約1.3m、深さ約0.5m、下端の長さ約1.0m、同幅約0.3mを測る。上端は南部が北部より幅が広い。上端の大きさに比べて、下端をなす壙底面は狭小である。本土壙は土壙墓とする明確な根拠を欠いている。しかし、住居域から最も離れた墓域南端部に位置しており、かつ周辺に他の種類の遺構が混在しないことや、その形状などからみて、被葬者を南枕で埋葬したものと考えざるをえない。ちなみに、その頭位はS-24°-Eになる。

土壙5（第35図） 墓域北端部（12F区）、方形周溝墓6の北側周溝に隣接する。平面形が不整円形をなし、断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約2.3m、深さ約0.4mを測る。埋土の堆積状態からは、長く開口していた様子が窺える。形状などからみても土壙墓ではないと判断される。遺物としては中期に属する土器が出土している。

土壙6（第35図） 墓域北端部（12F区）、方形周溝墓6の北方に位置する。平面形が南北に長い不整楕円形をなし、縦・横断面形とも逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約1.7m、同幅約0.9m、深さ約0.4m、下端の長さ約1.4m、同幅約0.7mを測る。上端は北部が南部より幅が広い。形状などからみて、棺を伴わない小型土壙墓の可能性が高い。

土壙12（第35図） 墓域北端部（11・12F区）、土壙18に隣接する。平面形が不整円形をなし、断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約1.5m、深さ約0.4mを測る。形状などからみて、土壙墓ではないと判断される。ただし、土壙墓である土壙18に隣接する点など、土壙墓集中地点に構築される特徴は、土壙5と同様注意を要する。遺物としては中期に属する土器が出土している。

土壙14（第35図） 墓域北端部（11F区）、土壙12の北方に位置する。平面形が不整円形をなし、断面形は浅い逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約1.6m、深さ約0.2mを測る。形状などからみて、土壙墓ではないと判断される。本土壙も土壙5・12と近接しており、同様の性格を有する土壙であると考えられる。土器片が出土しているが、時期は不明である。

土壙18（第35図） 墓域北端部（12F区）、方形周溝墓6・12の北方に位置する。平面形が東西に長い隅丸長方形をなし、縦・横断面形とも逆台形をなす中型土壙墓である。その規模は、上端の長さ約3.1m、同幅約1.8m、深さ約0.8m、下端の長さ約2.4m、同幅約0.4mを測る。上端は東部が南部より幅が広い。墓壙の南西隅には柱穴1個が存在するが、重複する他の遺構である。下端をなす壙底面は、西端部がゆるやかな段をなして一段高くなっている。つまり、最下端をなす

墳底面は長さ 1.93m に過ぎない。かつ、この部分も東部から西部にかけてしだいに上がっている。ちなみに、最下端の東西両端の比高差を算出すれば 23cm となり、墳底面は 7° ばかりの傾斜を有することになる。墳底面東部には、東端から 42cm 離れて長軸に直交する形に長径 21cm の河原石 1 個が、それに東接して多少小型の河原石 2 個が、それぞれ存在する。また、それらの一群から 20cm ばかり西方にも、長径 17cm の河原石 1 個が存在する。これらの石のやや上層には、同定を実施していないが人骨かと推定される骨の細片若干が、炭化物の薄層に覆われた状態で散在していた。つまり、土墳の形状、墳底面における河原石の配置と骨片の存在などからみて、本土墳は被葬者を東枕で埋葬した土墳墓であって、東部の河原石 3 個はいわゆる石枕として用いられたものと考えざるをえない。ちなみに、頭位は E-12° 30' -S になり、石枕と墳底面の形状からみて、被葬者の身長は 165cm 以内と考える。

遺物は、既に述べた骨片・河原石と、埋土中層から多量の土器のほか、打製石鏃・扁平片刃石斧・2 次加工のある剥片が、下層から打製石鏃が、それぞれ 1 個ずつ出土している。なお、下層出土の打製石鏃（第 120 図 47）は、その出土位置からみて遺体に射込まれていた可能性が残る。

土墳 19・20（第 35 図） 墓域北端部（11 F 区）、土墳 12 の北方に位置する。土墳 19・20 ともに平面形が不整円形をなし、断面形は逆台形をなす。その規模は、土墳 19 が上端の長さ約 2.2m、深さ約 0.4m、土墳 20 が上端の長さ約 1.4m、深さ約 0.4m を測る。両土墳には切り合いが認められ、土墳 19 が古く、土墳 20 が後から掘削されている。形状などからみて、土墳墓ではないと判断される。両土墳ともに中期に属する土器が出土している。土墳 5・12・14 と近接しており、これらと同様の性格を有すると考えられる。

土墳 23（図版第 23、第 36 図） 墓域北東端部（13 H 区）、竪穴住居 1 の南方に位置する。不整円形の土墳が 3 基切り合っている。断面形は浅い皿状をなす。その規模は、最大で上端の長さ約 2.8m、深さ約 0.4m を測る。南西部分から土器が出土しており、住居 1 と同様、後期に属すると考えられる。後期に属する土墳は、墓域側では極めて少ない。

土墳 76（図版第 19、第 36 図） 墓域北端部（11・12D 区）、方形周溝墓 7 の北方に位置する。平面形が東西に長い隅丸長方形で、縦・横断面形とも逆台形をなす大型土墳墓である。その規模は上端の長さ約 4.9m、同幅約 2.6m、深さ約 1.3m、下端の長さ約 2.8m、同幅約 0.5m を測る。上端は西部が東部より幅が広い。下端をなす墳底面は、西端から 2.2m 余りの位置からしだいに上がっている。ちなみに、墳底面の東西両端の比高差を算出すれば、17cm になる。なお、この墳底面は東西の中央部が段をなして、9～14cm ばかり低くなっている。この部分は、上端の長さ約 1m、下端の長さ約 0.7m、同幅約 0.5m を測る。

このへこみ部分に、墳底面に合わせて人頭大の平石が埋設されている。おそらく木棺底面に接する状態であったであろうと思われる。また、土墳内埋土中からは、東端から甕、中央から把手付鉢が出土している。出土状態からは、木棺上面または土墳内に埋置されたと推定される。

土墳 80（図版第 19、第 36 図） 墓域北端部（11E 区）、方形周溝墓 7 の北方に位置する。平面

形が南北に長い隅丸長方形で、縦・横断面形とも逆台形をなす小型土墳墓である。その規模は、上端の長さ約2.3m、同幅約0.7m、深さ約0.3m、下端の長さ約2m、同幅約0.4mを測る。下端をなす墳底面は、南部が北部より幅がやや広い。南北の中央部が最も低く、かつ南端は北端から1.6m離れた箇所からゆるやかに立ち上がって、端部に至る。埋土は上層の淡茶褐色粘質土、中層の黒褐色粘質土、下層の青灰色粘質土の3層からなる。墳底には北端から10cm余り離れて上部を欠失する土器1個が存在する。人骨は存在しないが、土墳縦断面の形状やこの土器の配置などからみて、本土墳は被葬者を北枕で埋葬した土墳墓であって、土器下部はいわゆる土器枕として用いるために半截、納置したものと考えざるをえない。ちなみに、頭位はN-8°-Wであり、土器枕の位置と墳底面の形状からみて、被葬者の身長は155cm以内と考える。遺物は半截土器1個が出土している。

土墳 81 (図版第20、第36図) 墓域北端部(11E区)、土墳80の東方に位置する。平面形が南北に長い隅丸長方形をなし、縦断面形が逆台形を、横断面形は弧状をなす小型土墳墓である。その規模は、上端の長さ約2.5m、同幅約0.7m、深さ約0.2m、下端の長さ約2.3m、同幅約0.4mを測る。下端をなす墳底面は、南部が北部より10cm余り幅が広い。また、南北の中央部が最も低いのであるが、北部が南部より多少高く、その差は約5cmを測る。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土墳の位置や形状からみて、土墳墓である可能性がきわめて高い。そうだとすれば、墳底面南部の幅が北部より広いので、被葬者を南枕で埋葬したものと考えざるをえない。ちなみに、頭位はS-35°30'-Wになる。

土墳 86 (第37図) 墓域北端部(11F区)、土墳20の西方に位置する。不整円形または不整楕円形の土墳が3基切り合っている。断面形は逆台形をなす。その規模は、最大で上端の長さ約5.0m、深さ約0.5mを測る。土層堆積からは、東側が最も古い。西側の不整楕円形部分では人頭大の石が埋置されており、石枕とも推測される。この部分は土墳墓である可能性があり、注意を要する。出土遺物からは中期に属すると考えられる。

土墳 88 (図版第20、第37図) 墓域北端部(10E区)、土墳80・81の北方に位置する。平面形が南北に長い隅丸長方形をなし、縦・横断面形とも逆台形をなす小型土墳墓である。その規模は、上端の長さ約2.8m、同幅約0.8m、深さ約0.2m、下端の長さ約2.3m、同幅約0.6mを測る。墓墳の西端中央部は西方に弧状に広がって、その内部に柱穴1個が存在するが、重複する他の遺構である。下端をなす墳底面は、北部が南部より20cmばかり幅が広く、また、4cm低い。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土墳の位置や形状からみて、土墳墓である可能性がきわめて高い。そうだとすれば、墳底面北部の幅が南部より広いので、被葬者を北枕で埋葬したものと考えざるをえない。ちなみに、頭位はN-8°30'-Eになる。

土墳 92 (第37図) 墓域北端部(11F区)、竪穴住居2の西に隣接する。平面形は楕円形で、横断面は逆台形、縦断面は皿状をなす。その規模は、上端の長さ約3.1m、深さ約0.3mを測る。墳底面は平坦ではなく、非常に浅くへこむ形状である。土墳内からは中位から人頭大の石、完形

に復元可能な甕が出土している。木棺を伴わない土壙墓の可能性も少なからず存在する。

土器からは中期に属すると考えられ、周辺遺構との切り合い関係からも方形周溝墓群に伴う時期の遺構である。

土壙 128・168（図版第 22、第 37 図） 墓域北端部（11G 区）、竪穴住居 2 の東方に位置する。両土壙とも平面形は、隅丸長方形をなし、縦・横断面形とも逆台形をなす小型土壙墓である。その規模は、128 が上端の長さ約 2.2m、同幅約 1.0m、深さ約 0.3m、下端の長さ約 1.6m、同幅約 0.4m を測る。168 が上端の長さ約 2.7m、同幅約 0.7m、深さ約 0.2m、下端の長さ約 2.3m、同幅約 0.4m を測る。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土壙の形状からみて土壙墓である可能性がきわめて高い。この場合、壙底面の傾斜や形態からは、両土壙とも北枕で埋葬されていた可能性が高い。本例のように、本遺跡では、並列して埋葬する土壙墓が複数存在する。

土壙 138（図版第 21、第 38 図） 住居域南部（10G 区）、土壙 128・168 の北方に位置する。平面形は、隅丸長方形をなし、縦・横断面形とも船底形をなす小型土壙墓である。その規模は、上端の長さ約 2.5m、同幅約 1.4m、深さ約 0.3m、下端の長さ約 1.9m、同幅約 0.7m を測る。壙底面中央よりやや西の位置に、砥石が置かれている。これは石枕というよりも副葬品あるいは仕切りの可能性が高い。壙底面の傾斜が東にわずかに高くなっていることもこれを裏付ける。この場合、頭位は東である。上面あるいは中位から、土器・人頭大の平石・粘土槐が出土している。これらは木棺を伴う場合、棺上面に置かれていたものと考えられる。

土壙 145（第 38 図） 住居域（9F 区）、掘立柱建物 3 の東方に位置する。平面形は、いびつな隅丸長方形をなし、縦・横断面形とも逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 3.4m、同幅約 0.8m、深さ約 0.4m を測る。壙底面は北側が 1 段浅く、また、中央部が 1 段低くなっている。壙底面は、南端で最も高くなっている。人骨の遺存をみないが、土壙の形状からみて土壙墓である可能性がある。本土壙からは、ススが付着する鉢が出土している。

土壙 153（図版第 24、第 38 図） 住居域（10F 区）、掘立柱建物 4 の東方に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は一定ではなく、いびつな逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 2.1m、同幅約 0.9m、深さ約 0.3m を測る。本土壙からは、ほぼ完形に復元可能な甕とともに、鶏形土製品の頭部が出土している。出土状態からは、意図的に埋納したとは考えがたく、使用後破碎し、廃棄されたものであろう。なお、甕にはススの付着が確認できる。

土壙 224（図版第 24、第 38 図） 墓域北端部（11D 区）、土壙 76 の北方に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 2.4m、同幅約 1.6m、深さ約 0.5m を測る。本土壙が、西側の土壙 77 を切り、破壊する形で構築されている。北側で甕が壙底面よりやや浮いた状態で出土している。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土壙の形状からみて土壙墓である可能性が高い。この場合、土壙北側が幅広であることから、頭位は北枕で、土器は棺上または土壙上に置かれていた可能性がある。

土壙 236（図版第 22、第 38 図） 墓域北端部（11D 区）、土壙 76 の北方に位置する。平面形は

不整楕円形で、縦・横断面形とも逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 2.0m、同幅約 0.9m、深さ約 0.3m を測る。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土壌の形状や位置からみて土壌墓である可能性が高い。この場合、墳底面は西側が高く、土壌の幅自体は東側が広いため、頭位については不明である。

土壌 243・244（図版第 24、第 39 図） 住居域（9E 区）、掘立柱建物 3 の西方に位置する。平面形は 243 が不整楕円形、244 が隅丸長方形をなす。両土壌ともに、縦・横断面形は逆台形をなす。その規模は、243 が上端の長さ約 3.3m、同幅約 0.8m、深さ約 0.5m、244 が上端の長さ約 2.8m、同幅約 1.1m、深さ約 0.5m を測る。人骨の遺存をみないが、土壌の形状や位置からみて土壌墓である可能性がきわめて高い。244 では、東側に大型の石材が据え置かれており、木棺小口を押さえていた石材である可能性がある。本例も並列埋葬と推定される。

土壌 252・253（第 39 図） 住居域（8E 区）、掘立柱建物 8 の直下に位置する。平面形は、両土壌とも不整楕円形をなす。また、両土壌ともに、縦・横断面形は逆台形をなす。その規模は、252 が上端の長さ約 3.6m、同幅約 0.9m、深さ約 0.4m、253 が上端の長さ約 3.9m、同幅約 0.8m、深さ約 0.4m を測る。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土壌の形状からみて土壌墓である可能性が高い。この場合、両土壌とも墳底面は東側が高く、頭位については東と推定される。本例も並列埋葬と推定される。

土壌 291・294（図版第 26、第 39 図） 住居域（7E 区）に位置する。291 は、後期建物に伴う柱穴の構築によって改変され、2 基の土壌が連続した状態で検出された可能性が高い。

294 の平面形は不整楕円形で、縦・横断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 2.1m、同幅約 0.7m、深さ約 0.2m を測る。顕著な施設や人骨の遺存をみないが、土壌の形状からみて土壌墓である可能性が高い。本例も並列埋葬と推定されるが、上記の通り 291 の改変によって、不明な点が多い。291 より土器が多数出土しているが、これについても流入の可能性が高い。

土壌 292（第 39 図） 住居域（6・7E 区）、土壌 295 に隣接する。平面形は不整楕円形で、縦断面形は皿状、横断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 4.5m、同幅約 1.0m、深さ約 0.4m を測る。墳底面の北端部には浅い帯状の堀込が確認でき、木棺小口板を埋め立てていた可能性が高い。人骨の遺存をみないが、土壌の形状からみて土壌墓の可能性がきわめて高い。埋土中より土器が出土している。

土壌 295（図版第 25、第 40 図） 住居域（6・7E 区）、土壌 292 に隣接する。平面形は不整楕円形で、縦・横断面形は逆台形をなす。その規模は、上端の長さ約 3.5m、同幅約 1.0m、深さ約 0.5m を測る。墳底面北側では木質が残存しており、遺存した木棺材の可能性はある。人骨の遺存をみないが、土壌の形状からみて土壌墓の可能性がきわめて高い。埋土中より数点の土器が出土している。

土壙 305（図版第 27、第 40 図） 住居域北部（4・5F 区）に位置する。平面形は、不整楕円形の土壙が 2 基切り合う形状をなす。土壙内部にある柱穴は、上層からの掘り込みである。断面形はあまり整っておらず、皿状に近い。その規模は、上端の長さ約 1.6m、幅約 1.0m、深さ約 0.2m を測る。堆積土中からは、骨片等は出土していない。土壙の形状等からみても土壙墓の可能性は低い。しかし、上層からはほぼ完形に近い磨製石剣（第 119 図 1）が出土している。周辺は、住居域として利用されているが、次に述べる土壙 306 のように、儀礼的性格を有する可能性がある。

土壙 306・314（図版第 28、第 40 図） 住居域北部（4・5F 区）に位置する。306・314 とも平面形は不整楕円形をなし、横断面形は皿状をなす。306 の規模は、上端の長さ約 6.2m、幅約 0.9m、深さ約 0.3m を測る。314 の規模は、上端の長さ約 4.2m、幅約 1.3m、深さ約 0.3m を測る。306 と 314 には切り合い関係が認められるが、新古の関係は明確ではない。堆積土は 2 層に区分されるが、上下層の境目に、廃棄された土器群が長さ 2m の範囲に面状に出土している。出土状況からは、この場で意識的に廃棄された様子が窺われる。この土器群の中には、雌雄のカモシカを描いた線刻絵画文土器 2 点（第 89 図 2・4）が含まれている。

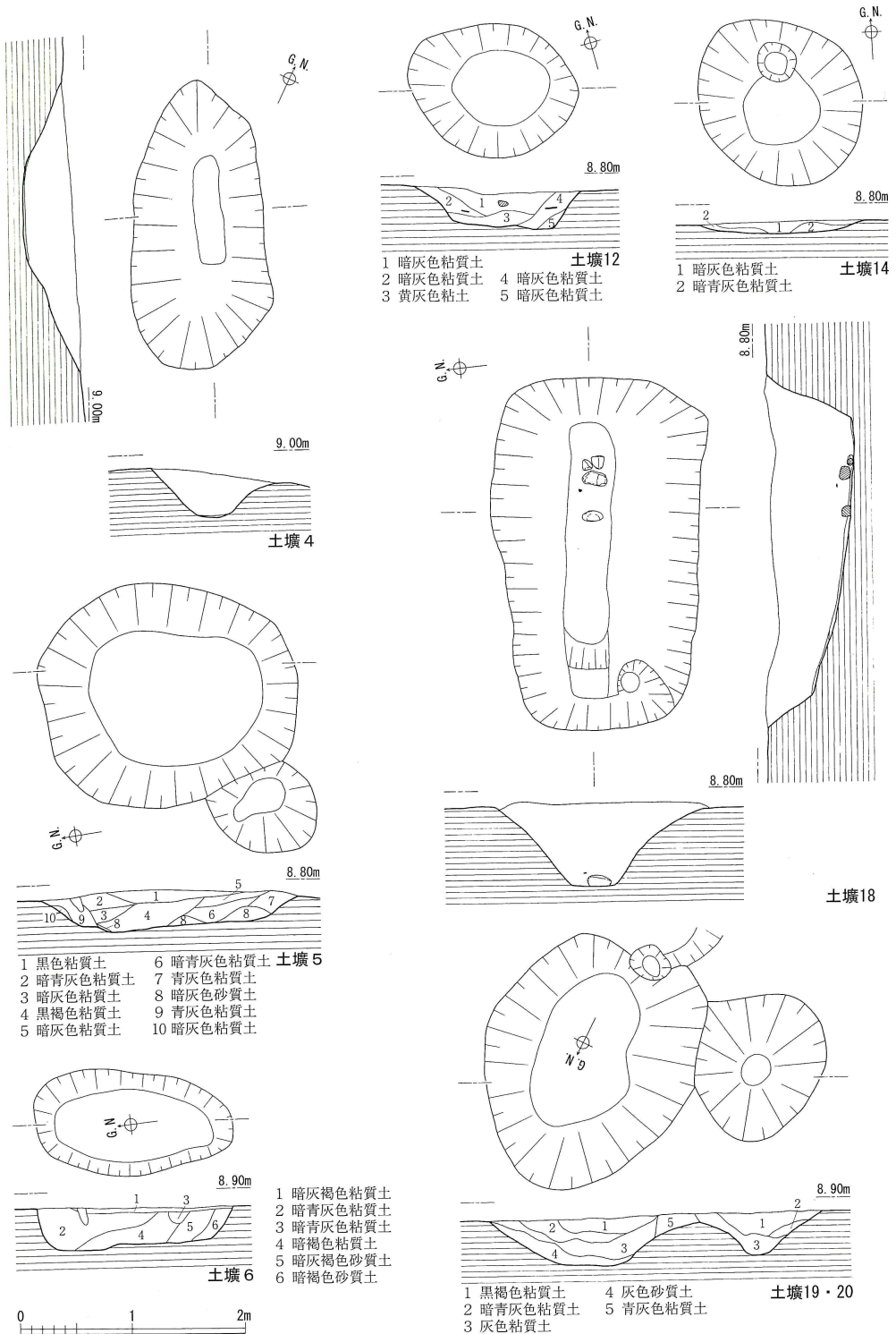
本遺跡で確認された土壙の中には、こうした土器を意図的に面状に廃棄する事例が複数確認できる。土壙 306・346 はその典型例であり、いわゆるごみ穴ではなく、儀礼的性格を有する土壙と考えられる可能性がある。

土壙 346（第 40 図） 住居域北部（3F・G 区）に位置する。西側が調査区外に延びているため、平面形は不明である。横断面形は皿状をなす。その規模は、検出範囲で、長さ約 3.0m、幅約 2.0m、深さ約 0.6m を測る。土壙の南辺には、土器群が意図的に面状に廃棄されている。土器は破碎されており、底より浮いた状態で密に敷き詰められている。自然に堆積した状態とは考えられず、何らかの目的をもってこのような行為が行われたものと推定できる。

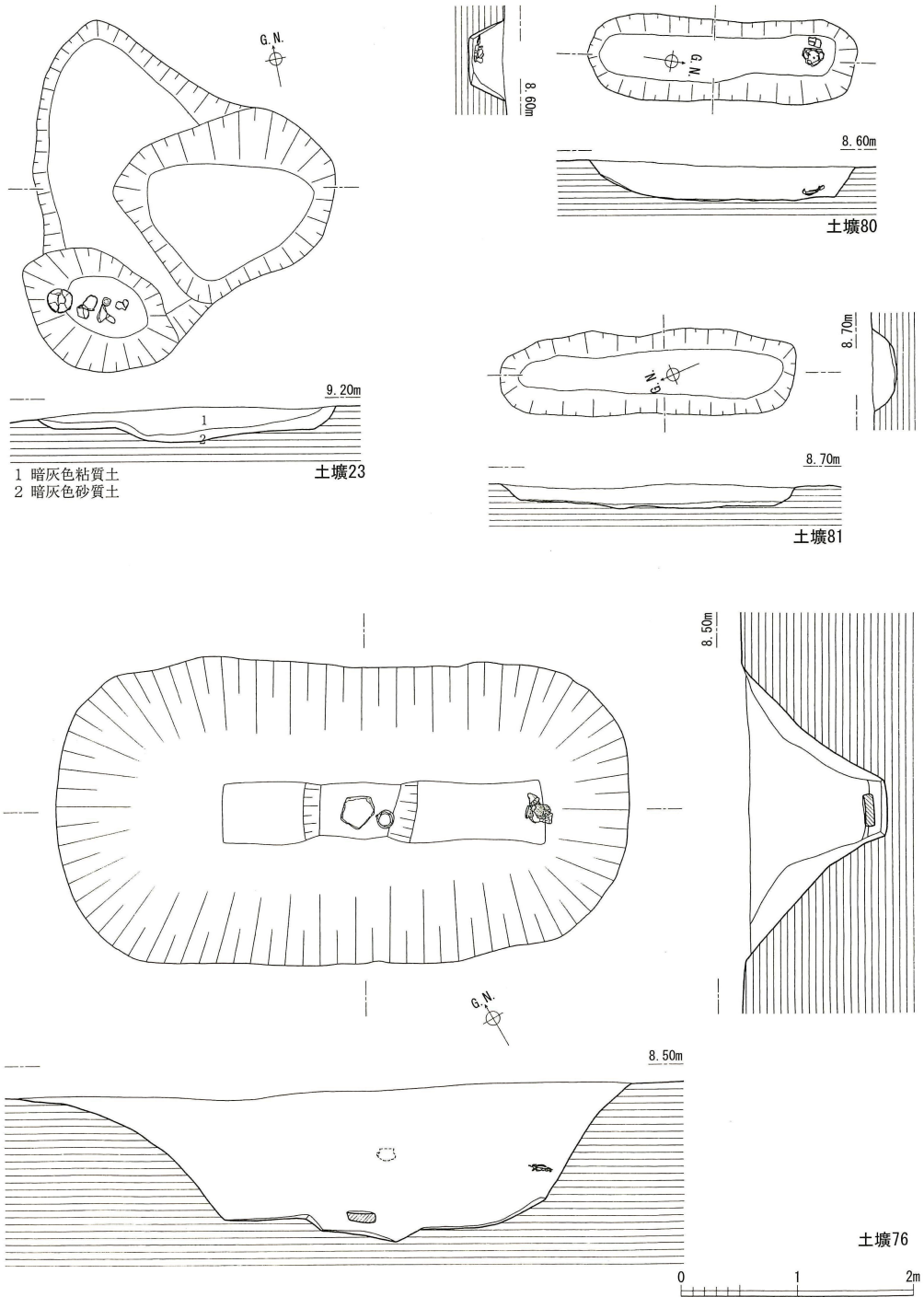
土壙 351（図版第 21、第 40 図） 住居域北部（3G・H 区）に位置する。平面形は東西に長い不整楕円形をなし、横断面形は逆台形をなす。両短辺は、二段掘り込みになっており、中央のみが 1 段深くなっている。西側短辺は、上層からの掘り込みの可能性もある。その規模は、上端の長さ約 3.0m、同幅約 0.7m、深さ約 0.4m、下端の長さ約 1.8m、同幅約 0.5m を測る。下端をなす壙底面は、東部が西部より幅広く、14cm 高い。

また、下層の黒色粘質土は有機質の腐食層であり、多量の炭化物とともに骨片、および円盤状の木製品が出土している。土壙の形状や骨片の遺存などからみて小型土壙墓である可能性が高い。そうだとすると、被葬者を東枕で埋葬した可能性が高い。ちなみに、頭位は N-88°-E になる。なおこの場合、円盤状木製品は、足元側に副葬されたと考えられる。

第2節 遺構各説

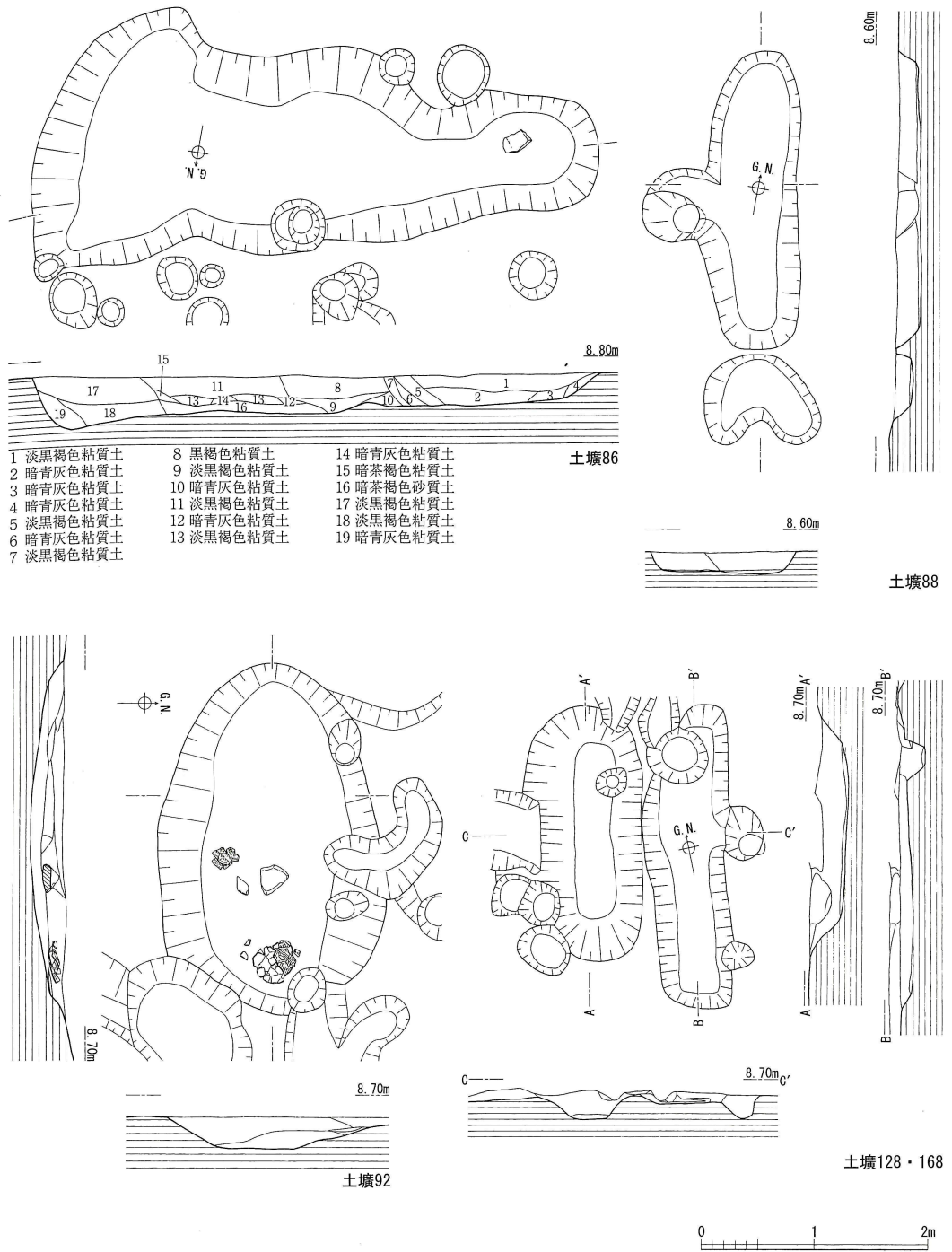


第35図 土壌4・5・6・12・14・18・19・20実測図(縮尺1/60)



第36図 土壙23・76・80・81実測図(縮尺1/60)

第2節 遺構各説



第 37 図 土壤 86・88・92・128・168 実測図（縮尺 1/60）